

御諮詢相成り御審議ヲ願ヒ得タルハ誠ニ結構ナリ又只今ノ御希望ノ点ハ之ニ添フ様ニ致度シト考ヘ居レリ
尚本条約ノ署名後長日月ノ間御批准ヲ奏請シ得サリシ事情ニ付先程書記官長ノ御報告中ニ申述ヘラレタル所ヲ補足申上タシ

先ツ本条約ハ一九〇六年ノ赤十字条約ノ改訂及俘虜ノ待遇ニ関スル条約ノ作成ノ両者ヲ目的トシテ招集セラレタル「ジュネーヴ」會議ニ於テ審議セラレ兩条約カ同時ニ同一會議ニ於テ締結セラレタル故兩者ニ付同時ニ御批准ヲ奏請スルコトト致度キ意向ナリシモ俘虜条約ニ付テハ其ノ実施ノ為ニハ陸海軍刑法等ノ改正ヲ要スルヲ以テ慎重研究ノ必要アリ之カ為速ニ御批准ヲ奏請スルコト困難ナリキ

次ニ本件赤十字条約第二十八条ニハ瑞西國ノ紋章保護ニ関スル規定新ニ挿入セラレ同國ノ紋章ヲ商標等トシテ使用スルコトヲ禁止スルコトナリタルカ一方我國ハ瑞西國ノ紋章ノミヲ单独ニ且片務的ニ保護スルカ如キ措置ヲ執ルコトハ好マサルノミナラス他方一九二五年ノ工業所有權条約ニハ一般的ニ各國ノ國ノ紋章ヲ商標等トシテ使

用スルコトヲ禁止スル旨ノ規定アルニ鑑ミ右赤十字条約上ノ義務ハ工業所有權條約上必要ナル措置ヲ執ルコトニ依リ果シ得ヘキモノト考ヘ右工業所有權條約ヲ我國ニ於テ実施スル見込ノツキタル上ニテ赤十字条約ノ御批准ヲ奏請スルコトカ實際上適當ト認メ工業所有權條約ノ処理ヲ待チ居タル次第ナリ

右ノ如ク二ツノ理由アリタルモ俘虜條約ニ付テハ最も關係深キ陸海軍兩省ニ於テ大体之ヲ批准セサル方宜シカルヘシトノ意見ナルヲ以テ政府トシテハ俘虜條約ト切離シ赤十字條約ノミニ付手續ヲ進ムルコトセリ

又工業所有權條約ハ過日本院ニ御諮詢アリ加入ノ運ニ至リタルヲ以テ茲ニ本條約ノ御批准ヲ奏請スルニ至リシ次第ナリ宜シク御審議ノ上御決定ヲ願タシ

一本議長ハ質問モ最早ヤ無キモノト認ムトテ採決ニ付シ全会一致ニテ可決セラレ十一時閉會ス

(昭和九年十月二十四日水曜日結城事務官記)

3 米国の常設國際司法裁判所加盟問題

485

昭和3年5月25日 在米國松平大使より
田中外務大臣宛

米国の常設國際司法裁判所加入問題に関する

決議案上院外交委員会へ提出について

付記 昭和一〇年一月条約局稿

「アメリカ合衆國ノ常設國際司法裁判所加入問題ニ関スル研究」(抜粋)

普通公第二八〇号

(6月18日接受)

昭和三年五月二十五日

在米

特命全權大使 松平 恒雄 (印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

米國ノ國際司法裁判所加入問題ニ関スル上院

決議案ノ件

米國ノ國際司法裁判所加入問題ハ一昨年十一月十一日「カ
ンサス・シチー」ニ於ケル「クーリツヂ」大統領ノ演説(同
年往電第二〇六号)ヲ以テ一応終結セルモノト一般ニ看做

サレ爾來本件ニ関シ格別議論等モナカリシ処今期議會開會セラルルヤ「マサチユーセツト」州選出共和黨上院議員「ヂ
レット」ヨリ本問題ニ関シ既加入國トノ間ニ更ニ意見ノ交換ヲ行ハムコトヲ大統領ニ提言スル趣旨ノ上院決議案(別
紙同決議案参照^{省略})ノ提出アリタリ

然ルニ右決議案ノ提出ハ一般ニ意外ノ感ヲ与ヘタルモノノ如ク新聞紙等ニテモ紐育「ウォールド」其他予テ加入論ヲ高調シ居ルモノノ外ハ該提案ノ動議ハ内政上ノ理由ニ出テタルモノナルヘシトナシ(例ヘハ「ヂレット」カ「フーバー」ノ大統領立候補ヲ支持シ居ル關係上右提案ハ該選挙戦ニ際シ加入論者ノ甘心ヲ買ハムカ為ニナサレタルモノナリトノ觀測ヲナスモノアリ)比較的冷淡ナル態度ヲ示シ居ル処上院外交委員会ハ四月九日ニ至リ初メテ本決議案ヲ上程シ其ノ際「ボラー」委員長ハ米國上院ハ同國留保第五項ヲ變更スル意向ナカルヘク外國側ニテ米國ノ加入ヲ望マハ右留保ヲ其儘承諾スヘキノミトノ趣旨ヲ述ヘ其他ノ多数委員モ同案ニ反対ハ頗ル氣乗セサル模様ナリシ由ナルカ五月二十

二日ニ至リ同委員会ハ九対八ヲ以テ本件審議ヲ次期議會迄延期スルコトニ決シタル趣報セラル

因ニ本件米國留保ニ関シ今日迄回答ヲナシタル國ハ二十八個國(未回答十個國)ナルカ其ノ中留保全部ヲ受諾シタルモノハ「アルバニア」「キウーバ」「ギリシヤ」「リベリヤ」「ルクセンブルグ」ノ五個國ニシテ他ノ二十三個國ハ大体連盟側採択ノ文案ニ依リ回答ヲ為シタル趣ナリ

右報告申進ス

本信写送付先 在英、仏、伊、白、独各大使

(付記)

「アメリカ」合衆國ノ常設國際司法裁判所加入

問題ニ関スル研究

第一節 一九二六年上院ノ付シタル留保条件承

認方ニ関スル米國政府ノ照会ニ対シ関

係國政府ヨリ回答發送ニ至ル迄ノ顛末

一、米國上院決議ニ至ル迄ノ經過

(一)一九二〇年十二月十六日ノ規程署名議定書批准協賛方ニ関スル「ハーディング」大統領ノ上院ニ対スル要求一九二三年(大正十二年)二月二十四日「ハーディング」

大統領ハ國際司法裁判所規程ニ関スル署名議定書批准協賛方ヲ上院ニ要求シ右要求ト同時ニ次ノ留保及条件ヲ付スヘキコトヲ提案シタリ

(I) 留保

米國政府ハ常設國際司法裁判所ノ義務的管轄權ニ関スル選択条項ヲ留保ス

(II) 条件

- 1、米國ノ裁判所加入ハ之カ為ニ米國ト國際連盟トノ法律的關係ヲ生セサルコト
- 2、米國ハ裁判官ノ選任ニ関シ他ノ諸國ト同一ノ權利ヲ行使シ得ルコト
- 3、米國ハ裁判所ノ費用ニ関シ公平ノ分担ヲ為スコト
- 4、米國ノ同意ナクシテハ裁判所ノ規程ヲ修正スルヲ得サルコト

但シ本案ハ「ハーディング」氏ノ物故ニ因リテ頓挫シタリ

(二) 裁判所加入ニ関スル一九二六年一月二十七日ノ上院ノ決議

「クリーツヂ」大統領ハ「ハーディング」氏ノ提案ヲ

踏襲シテ上院ノ決議ヲ求メタルモ「ロツヂ」氏ノ硬論

ニ制セラレテ決定ヲ見ルニ到ラス第六十八議會第二会期ノ開始セララルヤ「クリーツヂ」大統領ハ其ノ通常

教書(千九百二十四年十二月三日)ニ於テ從來ノ条件ノ

外更ニ「米國カ審判セラルコトヲ欲セサル事項ニ関シ

テハ裁判所ノ勧告の意見ニ拘束セラルルコトナシ」ト

ノ条件ヲ付シテ署名議定書ニ加入スルコトヲ有利ト認

ムル旨ヲ述ヘタリ

其ノ後上院ニ於テモ研究ヲ続ケ遂ニ千九百二十六年

(大正十五年)一月二十七日裁判所加入案ヲ七十六対十

七(賛成—共和黨四十民主黨三六、反対—共和黨十四民

主黨二農民労働黨十一)ヲ以テ可決セリ右可決ニ際シ

上院ハ左ノ如キ決議ヲ為セリ

「大統領ハ千九百二十三年二月十七日付國務卿ノ書翰

ヲ添ヘ千九百二十三年二月二十四日付ヲ以テ教書ヲ上

院ニ送付シ、右大統領教書ニ於テ提示セラルル加入書

ノ一部ト為サルヘキ条件及了解ヲ以テスル千九百二十

年十二月十六日ノ常設國際司法裁判所規程署名議定書

ヘノ合衆國ノ加入(右規程ニ掲ケラルル義務的管轄ニ

関スル選択条項ヲ受諾シ又ハ之ニ同意スルコトナク)

ニ付上院ノ好意的勧告及同意ヲ求メタルニ依リ左ノ如ク決議ス(出席上院議員ノ三分ノ二ノ同意ヲ以テ)

上院ハ千九百二十年十二月十六日ノ議定書及之ニ添付セラルル常設國際司法裁判所規程ヘノ合衆國ノ加入

(前記規程ニ掲ケラルル義務的管轄ニ関スル選択条項

ヲ受諾シ又ハ之ニ同意スルコトナク)ヲ勧告シ及之ニ

同意スルコト並ニ前記議定書ヘノ加入ノ為ノ合衆國ノ

署名ハ茲ニ本決議ノ一部且条件ト為サルヘキ左ノ留保

及了解ヲ条件トシテ為サルルコト

一、右加入ハ合衆國ノ國際連盟ニ対スル法律的關係又ハ合衆國ノ「ヴェルサイユ」條約ニ基ク義務ノ受諾ヲ含ムモノト解セラレサルヘキコト

二、合衆國ハ特ニ任命セラルル代表者ニ依リ並ニ國際連盟ノ理事会及總會ニ夫々代表セラルル他ノ國ト均等ノ地位ニ於テ常設國際司法裁判所ノ裁判官若ハ予備裁判官選任ノ為又ハ空席補充ノ為ノ理事会又ハ總會ノ一切ノ手續ニ参加スルコトヲ許サルヘキコト

三、合衆國ハ合衆國議會ニ依リ時々決定セラレ且割當

テラルル裁判所費用ノ公正ナル負担分ヲ支払フヘキコト

四、合衆国ハ前記議定書ヘノ合衆国ノ加入ヲ何時ニテモ撤回シ得ヘキコト及該議定書ニ添付セラルル常設国際司法裁判所規程ハ合衆国ノ同意ナクシテ修正セラレサルヘキコト

五、裁判所ハ一切ノ裁判所加入国及一切ノ利害関係国ニ適當ナル通告ヲ為シタル後並ニ関係国ニ公開弁論ヲ許シ又ハ弁論ノ機会ヲ与ヘタル後公然勧告の意見ヲ与フル場合ヲ除クノ外何等ノ勧告の意見ヲモ与ヘサルヘキコト又裁判所ハ合衆国カ利害関係ヲ有シ又ハ之ヲ有スト主張スル紛争又ハ問題ニ関スル勧告の意見ノ請求ヲ合衆国ノ同意ナクシテ受理セサルヘキコト

前記議定書ニ対スル合衆国ノ署名ハ該議定書ノ署名国カ前記ノ留保及了解ヲ前記議定書ヘノ合衆国ノ加入ノ一部且条件トシテ受諾スルコトヲ公文ノ交換ニ依リ表示スル迄為サレサルヘシ

本批准行為ノ一部トシテ更ニ左ノ如ク決議ス

加入ニ同意スルヤ否ヤヲ照会シ又三月二日付書翰ヲ以テ国際連盟事務総長ニ対シ右決議ノ全文ヲ通知スルト共ニ加入条件ニ対スル各署名国ノ賛否照会中ナル旨申送りタリ

三、米政府ノ照会ニ関シ国際連盟ノ執リタル措置

国際連盟ニ於テハ一九二六年三月ノ臨時總會ノ際日英仏伊四国ノ法律家間ニ於テ非公式ノ協議ヲ遂ケ米國側ノ主張スルカ如ク規程署名議定書署名国ノ各ト米政府トノ間ニ個々ニ文書ヲ交換スルトキハ署名国ノ意見区々トナリ徒ニ紛糾ヲ来タスノ虞アルニ付一方署名国全部ト他方米國トノ間ニ一ノ協定ヲ締結スルヲ可トスヘキコト二意見一致セリ

右總會ニ次テ理事會(三月十八日ノ會議)ハ英國代表「チエンバレン」氏ノ發議ニ基キ本問題ヲ議スルコトトナリ同氏ハ(イ)規程署名議定書ハ多数國間ノ約定ナルヲ以テ米國ノ加入条件モ亦多数國間ノ約定中ニ挿入スルヲ要シ之ヲ各別ニ交換公文中ニ挿入スルハ面白カラス(ロ)留保条件中ニハ署名議定書批准ノ權利ニ影響スルモノアル処批准セラレタル條約ニ依リ設定セラレタル權利ヲ單純ナル

合衆国ハ合衆国ト他ノ一國又ハ數國トノ間ノ紛争解決ノ為ニスル常設国際司法裁判所ヘノ出訴カ紛争當事國間ニ締結セラルル一般の又ハ特別ノ協定ヲ以テスル同意ニ依リテノミ為サレ得ルモノナル旨ノ了解ヲ以テ前記議定書及規程ヲ承認スルコト

又更ニ左ノ如ク決議ス

茲ニ承認セラルル前記議定書及規程ヘノ加入ハ外國ノ政策又ハ内政ノ政治の問題ニ立入ラス干渉セス又ハ捲込マレサルノ合衆國ノ伝統的政策ヲ離ルルコトヲ合衆國ニ必要ナラシムルモノト解セラレサルヘク又前記議定書及規程ヘノ加入ハ純粹ナル「アメリカ」の問題ニ対スル合衆國ノ伝統的態度ノ同國ニ依ル拋棄ヲ意味スルモノト解セラレサルヘキコト

二、上院ノ留保決議ニ関シ米政府ヨリ關係國政府ヘノ照會

上院ニ於テ裁判所加入案可決セラルルヤ國務卿ハ一九二六年(大正十五年)二月十二日付書翰ヲ以テ裁判所規程署名議定書ノ一切ノ署名國政府ニ対シ右決議ノ認証謄本ヲ送付シ右各政府ニ於テ前記留保条件ヲ以テスル米國ノ

公文交換ニ依リテ變更スルハ慣例ニ反ス(ハ)第五留保条件(勧告の意見)ニ付テハ解釈ヲ確定シ置クコトヲ要ス(ニ)署名議定書署名國ト米國トノ間ニ一ノ新ナル約定ヲ締結スルコト困難ナラサルヘシトノ諸点ヲ挙ケテ左ノ提案ヲ為シタリ

(一)米政府ヨリ決議文ヲ受領シタル政府ハ米國政府ニ対シ交換公文ニ依ルコト困難ニシテ一般の約定ニ依ルノ必要アルヘキ旨回答スルコト

(二)一九二六年九月一日壽府ニ本問題ノ討議及新協定作成ノ為署名國全部及米國ノ代表者ノ會議ヲ開催スルコト
右提案ハ理事會ニ於テ可決セラレ之ニ基キ國際連盟事務總長ハ三月二十九日付書翰ヲ以テ米國政府及署名議定書署名國全部ノ政府ニ対シ右理事會ノ議事録抜粹ヲ送付シ前記九月一日ヨリ開催セラルヘキ會議ニ代表者ヲ派遣セラレ度キ旨招請スル所アリタリ

四、署名國會議參列方招請ニ対スル米國ノ回答

米國政府ハ前述ノ招請ニ対シ一九二六年四月十九日付事務總長宛書翰ヲ以テ右會議參加ヲ拒絕セリ其ノ要旨ハ米國ノ加入条件ハ明白ニシテ各加盟國ヨリ各別ニ承諾ヲ求

ムヘキコトヲ規定シ居リ國務長官ニ於テ此ノ手續ヲ變更シ或ハ右留保条件ヲ修正シ又ハ解釈ヲ決定スルノ権限ヲ有セス且米國ハ其ノ加入条件ノ実施ノ為新ナル協定ヲ必要トスルモノトハ思惟セス本件ニ関シ署名議定書加盟國カ會議ヲ開クコトニ對シテハ何等異議ナキモ米國カ同會議ニ代表者ヲ送ルコトハ無益ナリト謂フニ在リタリ

五、裁判所規程署名國會議

前項ニ述ヘタル如ク米國ハ本件會議參加ニ反對シタルモ既ニ多數國ノ招請受諾アリタルニ依リ(本邦ハ一九二六年七月十日付書翰ヲ以テ杉村國際連盟事務局長ヲシテ連盟事務總長ニ對シ會議ニ參加スヘキ旨ヲ回答セシメタリ)會議ハ予定ノ如ク一九二六年九月一日ヨリ「ジュネーヴ」國際労働事務局ニ開催セラレ帝國代表者ヲ含ム三十九國ノ代表者之ニ參加セリ

會議ノ結果九月二十三日ノ本會議ニ於テ各國代表者ハ左ノ趣旨ノ最終議定書ニ署名セリ

米國ノ裁判所加入ハ大ニ歡迎スヘキモノナル旨ヲ記述シタル後各國政府ヨリ米國政府ニ對シ為スヘキ回答ノ基礎タラシムル為米國留保条件ノ各項ニ付會議ノ議決セル結

タル後裁判所自身カ規程第三十条ニ基キ一九二六年七月三十一日行ヒタル裁判所規則ノ改正(第七十三條及第七十四條)ニ依リ満足シ居ルモノト思考セラハルモ更ニ此ノ點ニ關シ殊ニ公開廷ニ於テノ意見ヲ發表スヘキコトニ關スル主義上ノ規定ヲ新議定書ニ掲クルモ差支ナシ

(ロ)留保条件第五ノ後半(米國ニ關係アル紛争又ハ關係アリト主張スル紛争及問題ニ付テノ勸告の意見)ニ個ノ場合ヲ區別スルコトヲ要ス

(A)米國カ當時國タル紛争ニ付勸告の意見ヲ与フル場合ニ付テハ裁判所カ一九二三年七月二十三日連盟國ト非連盟國間ノ紛争タル東「カレリア」事件ニ関シ与ヘタル勸告の意見第五ニ於テ為シタル判例ハ米國ノ希望ニ添フヘシ

(B)米國カ単ニ利害關係アリト主張スル紛争又ハ國際紛争ニ非サル問題ニ関シテハ米國ニ對シ理事會又ハ總會ニ代表セラルル諸國ト均等ノ地位ヲ認ムルコトニ異議ナシ但シ米國ノ本件留保ハ勸告の意見ヲ求ムル理事會又ハ總會ノ決定ニハ全會一致ヲ要ストノ前提

論ヲ掲ケ裁判所規程加盟國カ右結論ヲ採用シテ成ルヘク速ニ對米回答ヲ發スヘキコトヲ勸告スルト共ニ會議長ニ於テ對米回答文案ヲ作成シ之ヲ右各國政府ニ送付スヘキコトヲ定メタルモノナリ

會議ノ議決セル結論ノ要旨左ノ如シ

(一)留保条件第一(米國ノ國際連盟及「ヴェルサイユ」條約トノ無關係)異議ナシ

(二)留保条件第二(米國ノ裁判官選舉參加)異議ナシ

(三)留保条件第三(裁判所經費ノ分担)異議ナシ

(四)(イ)留保条件第四前半(米國ノ裁判所脱退ノ權利)異議ナキモ規程加盟國モ亦三分ノ二以上ノ多數ヲ以テ米國留保条件第四ノ後半及第五ノ各自ノ受諾ヲ撤回スルノ權利ヲ有スルコトヲ認ムルコト

(ロ)留保条件第四ノ後半(規定ノ修正ニハ米國ノ同意ヲ要スルコト)異議ナシ

(五)(イ)留保条件第五ノ前半(一切ノ加入國及利害關係國ニ對シ勸告の意見ノ請求アリタルコトヲ通告シ弁論ノ機會ヲ与ヘ且公開廷ニテ意見ヲ發表スルコト)本件ニ関シテハ米國政府ハ署名國政府ヘ照會狀ヲ發送シ

ヨリ出發セルカ如キモ斯カル前提ハ未タ必スシモ確立セルモノト謂フヘカラス或ル場合又ハ恐ラク一切ノ場合ニ於テ多數決ニテ十分ナルニ至ラスト確言スルヲ得ス故ニ米國ニ對シテモ單ニ連盟國又ハ理事國トノ均等ノ地位ヲ保障シ得ルニ止マル即チ理事會(又ハ總會)ニ代表セラルル一國カ其ノ反對ニ依リ右會議ニ於ケル勸告の意見請求ノ提案ノ採択ヲ拒否シ得ルカ如キ場合ニハ合衆國モ亦同等ノ權利ヲ享有シ得ルモ右提案ノ採択カ多數決ニ依リ決セラハル場合ハ合衆國ノ反對ハ連盟國ノ反對投票一票ノ効力ヲ有スルニ止マルモノナリ

連盟國ハ連盟規約ニ從ヒ裁判所カ与フルコトアルヘキ勸告の意見ニ對シテハ重大ナル価値ヲ認ムル次第ナリ本會議ハ合衆國政府カ連盟ノ活動ニ密接ナル關連アル勸告の意見ノ価値ヲ減少セントスルカ如キ意圖ヲ有スルモノニ非サルコトヲ確信スルモ第五留保ニ於テ用ヒラレタル措辭ハ斯カル解釈ヲ為サシムル惧ナキニ非ス抑々連盟國カ理事會又ハ總會ニ於テ其ノ權利ヲ行使スルニ當リテハ勸告の意見ノ請求ヲ必

486

昭和3年11月30日 在米出淵大使より
田中外務大臣宛

米国の常設国際司法裁判所加入問題に関する

クーリッジ大統領の意向について

普通公第六一九号

(昭和4年1月7日接受)

昭和三年十一月三十日

在 米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

要ナラシムルニ至リタル事情ニ付充分ナル知識ヲ有
スルト共ニ紛争ノ解決ヲ見ルニ至ラサル場合ニ於ケ
ル規約上ノ責任ヲ十分自覚シ居ルモ非連盟国ハ之ト
異ナル立場ニ在ルヘシ故ニ勧告の意見ノ請求ニ関シ
非連盟国ノ従フヘキ手續問題ハ極メテ重要ニシテ從
テ第五留保ノ後段ニ規定セラルル同意ノ与ヘラルヘ
キ方法ハ連盟国間ノ紛争ノ平和的解決ヲ一層困難ナ
ラシメサルコトヲ保障スルカ如キ一ノ補足協定ニ依
リ定メラルヘキコト望マシト思考ス

尚最終議定書ハ右結論カ米國ノ受諾スル所トナルヘキヲ信
スル旨ヲ述ヘ最後ニ米國ノ留保条件中ニハ之ヲ適用スルカ
為米國ト他ノ署名國トノ間ニ一ノ協定ヲ遂クルコトヲ要ス
ルモノアリト為シ右協定(議定書)原案ヲ作成シ之ヲ付屬
書トシテ添付セリ右議定書ノ要旨次ノ如シ

(一)裁判官ノ選舉ヲ目的トスル理事会及總會ニ於ケル一切ノ
議事ニ米國代表者ノ参加ヲ許容スヘキコト及米國ノ投票
ハ規程ニ於テ要求セラルル投票數ノ計算ニ算入セラルヘ
キコト(第一條)

(二)裁判所規程ノ改正ニハ一切ノ締約國ノ同意ヲ要スヘキコ

ト(第二條)

(三)裁判所ハ勧告の意見ヲ公開廷ニテ發表スヘキコト(第三
條)

(四)第五留保ノ後段ニ規定セラルル米國カ勧告の意見ノ請求
ニ同意ヲ与フルノ手續ハ米國政府ト理事会トノ間ノ協定
ニ依リ之ヲ定ムルコト及米國カ當事國タラサル紛争又ハ
紛争ニ非サル國家間ノ問題ニ関シ裁判所カ理事会又ハ總
會ノ請求ニ基キ勧告の意見ヲ与フルコトニ付米國ニ於テ
故障ヲ申出タル場合ニハ裁判所ハ右故障ニ対シ理事会又
ハ總會ニ於テ連盟國ノ為シタル反対投票ト同一ノ効力ヲ
付与スヘキコト(第四條)

(五)本議定書ノ規定ハ第七條ヲ留保シ裁判所規程ノ規定ト同
一効力ヲ有スヘキコト(第五條)

(六)批准條項(第六條)

(七)米國ハ何時ニテモ一九二〇年十二月十六日ノ議定書ノ加
入ヲ撤回シ得ルト共ニ他ノ署名國モ亦留保條件第四ノ後
半及第五ノ承諾ノ撤回ヲ通告シ得ヘク右通告後一年以內
ニ米國ヲ除ク締約國ノ三分ノ二カ同様ノ通告ヲ為シタル
トキハ本議定書ハ効力ヲ失フヘキコト(第七條)

(八)将来裁判所規程ニ加入スル國ノ署名ノ為開キ置カルヘキ
コト

六、關係國政府ノ対米回答

前記署名國會議ノ議長ハ會議ノ決議ニ基キ大正十五年九
月三十日付外務大臣宛書翰ヲ以テ會議ノ結論ヲ其ノ儘記
載シタル対米回答案ヲ送付シ来リタルヲ以テ帝國政府ニ
於テモ他ノ署名國ト同様右回答案ニ從ヒ昭和元年(一九
二六年)十二月三十一日付ヲ以テ松平大使ヨリ米國政府
ニ回答セシメタリ同様ノ回答ヲ發送シタルハ帝國ヲ含メ
二十四國ノミナリ

外務大臣男爵 田中 義一殿

米國ノ國際司法裁判所問題ニ関スル十一月二

十四日「クーリッジ」大統領ノ表意ニ付報告

ノ件

十一月二十四日「クーリッジ」大統領ハ十二月三日開會セ
ラルヘキ次期議會ノ議事等ニ付協議旁々在華中ノ共和党上
院議員ヲ招待シタル由ナルカ其ノ際大統領ハ来年三月四日
同大統領ノ任期終了迄ニ不戰條約ノ批准及海軍擴張案ノ成
立ヲ了シ又國際司法裁判所加入諸國トノ間ニ何トカ協定ヲ
遂ケ米國ノ同裁判所加入問題ニ対スル障礙ヲ除去シ度意向
ナル旨ヲ述ヘタル趣ナル処右裁判所加入問題ノ件ニ関シ多
數新聞紙ノ華府通信ハ本件交渉ハ大統領、國務長官協議ノ
上速ニ着手セラルヘキ筈ナルカ上院ニ依ル米國側留保條件
ノ修正ハ殆ト問題トナラサル一方列國側ノ態度モ今日迄ノ
所ニテハ格別緩和ノ徵候アル次第ニモ非スシテ今次大統領
ノ發表ハ單ナル希望ノ表明ニ過キス右希望達成セラルヘキ
ヤ否ヤハ将来本件交渉ノ成行ニ徴スル外ナシトノ趣旨ヲ報
シ居リ尚又一部ニハ今次大統領ノ發表ハ例ヘハ同大統領ノ
休戰記念日演説ニ対スル欧州方面ノ反感ヲ和ケ延イテハ列

国側ノ不戦条約批准促進ニ資セムトスル単ナル「ゼスチュアー」ニ過キストノ皮相ナル見方ヲナシ居ルモノモアリ
右ニ関シ多数重要新聞紙ハ杜説ヲ掲ケ殊ニ民主党系新聞ニ於テハ二十六日「ウォールド」ハ「クーリツヂ」大統領離任前ニ本件交渉ヲ開始セムトスルハ時期遅キニ失スルモ之ヲナササルニ勝レリ
「ク」氏任期中ニ該交渉成就セストモ「フーバー」執政後ノ本件交渉ノ為メ道途ヲ開拓スル所以ナリトナシ尚ホ不戦条約トノ關係上米國ノ國際司法裁判所加入カ益々緊要トナレルコトヲ説キ同日ノ「ボルチモア・サン」「ブルックリン・デリー・イーグル」等モ大体同趣旨ノ杜説ヲ掲ケ居レリ
將又同日ノ紐育「タイムス」ハ本件交渉從來ノ成行ハ列國側ヨリ米國ニ対シ留保第五項ノ説明ヲ求メタルニ対シ米國側ニテ何等ノ回答ヲ為サス其ノ儘ニ停止セラレ居ル次第ナル処今ヤ米國大統領選挙モ終了シ本件ハ最早政治問題ヲラサルニ至リ旁々一般ノ気分余程変化シ来レリトテ米國側カ留保条項ノ辞句ヲ差支ナキ限り訂正シ又ハ之ニ対シ懇切ナル説明ヲ与ヘ以テ仏國トノ間ニ可然妥結シ得ヘキ余地アルヘシトノ趣旨ヲ述ヘ居レルモ共和党系新聞紙ハ二十七日ノ紐育「ヘラルド・トリビュン」

昭和四年二月十五日

在 米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

米國ノ國際司法裁判所加入問題ニ関連シ上院

議員「エリフ・ルート」渡欧ノ件

客年十一月大統領カ米國ノ國際司法裁判所加入問題解決ノ希望ヲ洩ラセル次第ニ付テハ同月二十日付拙信第六一九号ヲ以テ報告申進メ置キタルカ本月七日ノ諸新聞華府通信ハ前國務卿「エリフ・ルート」氏ハ来ル三月十一日寿府ニ開カルヘキ國際司法裁判所規則改訂委員会ニ出席ノ為メ渡欧ノ機會ヲ利用シ米國ノ同裁判所加入問題解決方尽力スヘキ旨ヲ報シ居レリ然ルニ國務長官「ケロツグ」氏ハ右ハ全然「ル」氏一個ノ意図ニ出テタルモノニシテ政府ノ委嘱等ヲ受ケタルモノニアラサル旨新聞記者団ニ対シ説明セル趣ナルカ新聞紙中前記大統領ノ声明及最近「ル」氏大統領ト会见シタルコトアル事實等ヨリ推シ其間ニ何等カノ關係アルヤニ報スルモノ少カラス右ニ関シ尚「ルート」氏ハ六日「ボラー」「スワンソン」「ウォルシュ」等上院外交委員会有力

カ米國留保条件ノ固守ヲ強調シ尚ホ米國ハ他國側ヨリ司法裁判所ニ対シ例ヘハ移民問題ニ関スル勸告ヲ求ムルカ如キ事態ノ出現スルコトヲ好マス
ト述ヘタル外特ニ纏リタル所説ヲナスモノナク同党系有力新聞紙ノ多数ハ沈黙ノ態度ヲ執リ居ルモノノ如シ

因ニ本年五月二十五日付拙信公第二八〇号所報米國ノ國際司法裁判所加入問題ニ関スル決議案ニ関シ該決議案ノ提出者タル「ヂレット」ハ前記大統領ノ表示ニ顧ミ本件交渉ノ結果判明スル迄ハ之カ通過方ヲ促進セサルヘキ旨ヲ發表セシ趣ナリ

右報告申進ス

本信写送付先 在英、仏、伊、白、独、露各大使及國際連

盟事務局

487 昭和4年2月15日

在米國出淵大使より
田中外務大臣宛

ルート前米國國務長官の國際司法裁判所規則

改訂委員会への出席について

普通公第一一二号

(3月18日接受)

者ト会谈シタル趣ナルカ多数新聞紙ハ「ル」氏ハ該会见ノ

結果上院カ依然トシテ從來ノ留保条件ヲ固執スヘキコトヲ確メタリトノコトニテ同氏ハ主トシテ留保条件第五項受諾方ニ付關係國側説得ニ努ムルナルヘシト報シ居レリ
本件ニ関スル諸新聞ノ論調ハ「ル」氏ハ本使命ニ当ル最適任者タルコト並ニ「ル」氏渡欧ノ際「ヒューズ」氏カ同裁判所判事トシテ彼地ニ在ルハ本件「ル」氏ノ活動上多大ノ便宜タルヘシトノ趣旨ヲ述ヘツツモ「ル」氏尽力ノ結果ニ付テハ大体悲觀的ノ予想ヲ洩シ居レリ

右報告申進ス

本信写送付先 連盟帝國事務局

488 昭和4年2月21日

在米國出淵大使より
田中外務大臣宛(電報)

常設國際司法裁判所加入問題に關する米國國務長官の公文について

付 記 昭和四年二月一九日付

右米國國務長官公文

ワシントン

発

第六二号

米国ノ国際司法裁判所加入問題ニ関シ二月十九日付国務長官公文接到セルカ其ノ要領左ノ通右公文二十日公表セラル尚「テキスト」郵送ス

本件ニ関スル千九百二十六年二月十二日付国務長官公文ニ対シ二十四ヶ国政府ヨリ同年九月寿府ニ於ケル議定書署名国会議ノ為シタル勸告ノ趣旨ニ依リ回答ヲ寄セラレタルカ該回答中ニ為サレタル諸提案ノ根柢ニハ不確実ナル要素存シ引続キ意見ノ交換ヲ為スコト必要ナルカ如シ蓋シ理事会ノ権限及議事手續ハ連盟規約ニ基クモノナル処此ノ規約ハ何時ニテモ修正セラレ得ヘク又東「カレリア」事件ニ関スル司法裁判所ノ決定並ニ同裁判所ノ規則ノ如キモ隨時変改セラレ得ヘキモノナレハナリ之ヲ要スルニ前記諸提案ノ実行性如何ハ暫ラク之ヲ問題トセサルモ「プロトコール」案ノ米国側ニ対シ与フル保護ハ充分ナラサルカ如シ然ルニ前記二十四ヶ国政府ニ於テハ非公式意見ノ交換ヲ行フコトヲ計画セラルル次第ナル処米国政府ハ本件ニ関スル関係国間ノ実質上ノ意見ノ相違極メテ僅少ナル事実ニモ顧ミ右非公

acceptable to your Government as a part and condition to the adherence of the United States to the said Protocol and Statute.

Five Governments unconditionally accepted the Senate reservations and understandings, three indicated that they would accept but have not formally notified my Government of their acceptance, fifteen simply acknowledged the receipt of my Government's note of February 12, 1926, while twenty-four have communicated to my Government replies as hereinafter indicated.

At a conference held in Geneva in September 1926 by a large number of the States signatories to the Protocol of Signature of the Statute of the Permanent Court of International Justice, a Final Act was adopted in which were set forth certain conclusions and recommendations regarding the proposal of the United States, together with a preliminary draft of a Protocol regarding the adherence of the United States, which the

式話合ニ依リ米国ノ権益保護上何等カノ合意ニ達スヘキヤノ感ヲ有スルモノナリ
連盟事務局長ニ転電シ英、仏、伊、白、露、独ニ暗送セシム

(付 記)

February 19, 1929

Excellency:

I have the honor to refer to my note of February 12, 1926, with which I transmitted for the information of your Government a copy of the Resolution adopted by the Senate of the United States on January 27, 1926, setting forth certain reservations and understandings as conditions on which the United States would adhere to the Protocol of Signature of December 16, 1920, of the Statute of the Permanent Court of International Justice. In that note I asked to be informed whether the reservations and understandings contained in the Resolution of the Senate of the United States were

Conference recommended that all the signatories of the Protocol of Signature of December 16, 1920, should adopt in replying to the proposal of the United States. Twenty-four of the Governments adopted the recommendations of the Conference of 1926 and communicated to the Government of the United States in the manner suggested by the Conference. By these replies and the proposed Protocol attached thereto the first four reservations adopted by the Senate of the United States were accepted. The fifth reservation was not accepted in full but so much of the first part thereof as required the Court to render advisory opinions in public session was accepted, and the attention of my Government was called to the amended rules of the Court requiring notice and an opportunity to be heard. The second part of the fifth reservation therefore raised the only question on which there is any substantial difference of opinion. That part of the reservation reads as follows:

. . . . Nor shall it (the Court) without the consent of the United States entertain any request for any advisory opinion touching any dispute or question in which the United States has or claims an interest.

It was observed in the Final Act of the Conference that, as regards disputes to which the United States is a party, the Court had already pronounced upon the matter of disputes between a member of the League of Nations and a State not a member, and reference was made to advisory opinion No. 5 in the Eastern Carelia case in which the Court held that it would not pass on such a dispute without the consent of the non-member of the League. The view was expressed that this would meet the desire of the United States.

As regards disputes to which the United States is not a party but in which it claims an interest, the view was expressed in the Final Act that this part of the fifth reservation rests upon the presumption that the

the Council", and that "the manner in which the consent provided for in the second part of the fifth reservation is to be given" should be the subject of an understanding to be reached by the Government of the United States with the Council of the League of Nations.

The Government of the United States desires to avoid in so far as may be possible any proposal which would interfere with or embarrass the work of the Council of the League of Nations, doubtless often perplexing and difficult, and it would be glad if it could dispose of the subject by a simple acceptance of the suggestions embodied in the Final Act and draft Protocol adopted at Geneva on September 23, 1926. There are, however, some elements of uncertainty in the bases of these suggestions which seem to require further discussion. The powers of the Council and its modes of procedure depend upon the Covenant of the League of Nations which may be amended at any time. The ruling of the Court in the Eastern Carelia case and the rules of

adoption of a request for an advisory opinion by the Council or the Assembly requires a unanimous vote. It was stated that since this has not been decided to be the case it can not be said with certainty whether in some or all cases a decision by a majority may not be sufficient but that in any case where a State represented on the Council or in the Assembly would have a right to prevent by opposition in either of these bodies the adoption of a proposal to request an advisory opinion from the Court, the United States should enjoy an equal right. Article 4 of the draft Protocol states that "should the United States offer objection to an advisory opinion being given by the Court, at the request of the Council or the Assembly, concerning a dispute to which the United States is not a party or concerning a question other than a dispute between States, the Court will attribute to such objection the same force and effect as attaches to a vote against asking for the opinion given by a member of the League of Nations either in the Assembly or in

the Court are also subject to change at any time. For these reasons, without further inquiry into the practicability of the suggestions, it appears that the Protocol submitted by the twenty-four Governments in relation to the fifth reservation of the United States Senate would not furnish adequate protection to the United States. It is gratifying to learn from the proceedings of the Conference at Geneva that the considerations inducing the adoption of that part of Reservation 5 giving rise to differences of opinion are appreciated by the powers participating in that Conference. Possibly the interest of the United States thus attempted to be safeguarded may be fully protected in some other way or by some other formula. The Government of the United States feels that such an informal exchange of views as is contemplated by the twenty-four Governments should, as herein suggested, lead to agreement upon some provision which in unobjectionable form would protect the rights and

interests of the United States as an adherent to the Court Statute, and this expectation is strongly supported by the fact that there seems to be but little difference regarding the substance of these rights and interests.

Accept, Excellency, the renewed assurances of my highest consideration.

Frank B. Kellogg

489 昭和4年3月4日 田中外務大臣より
在パリ佐藤連盟事務局長宛(電報)

米国の留保付加盟を容易にすべく措置方訓令

付記 大正一五年八月一九日付幣原外務大臣より在

英国松井大使宛第八三号

米国の国際司法裁判所加入問題に関する訓令

本省 3月4日後発

第二九号

貴電第一二三号ニ関シ

本件ニ付特ニ本邦ヨリ提案又ハ主張スヘキ点ナキモ現行規

程ニ欠除スル規程改正及裁判所脱退ニ関スル規定ノ補充方
ニ付テハ御留意アリ度シ
尚米國ノ留保付加入ニ関シテハ右加入ヲ容易ナラシムル様
規程ヲ改正スルノ方針ヲ以テ大正十五年在英大使宛往電第
八三号訓令ノ趣旨ニ依リ適宜措置セラレ度シ

(付記)

本省 大正15年8月19日前発

第八三号

吉田参事官へ

杉村局長宛往電第一二九号ニ関シ

貴官ハ常設国際司法裁判所米國加入問題會議ニ帝國代表ト
シテ出席セラレ左ノ諸点御含ノ上可然措置アリタシ

一、米國ノ留保付加入受諾ノ形式ニ関シテハ米國側從來ノ
態度ニ鑑ミ同國及規程署名國間又ハ署名國ノミノ間ニ右
加入ニ関スル條約ヲ締結スルコト至難ナルヘキニ依リ各
國夫々必要ナル憲法上ノ手續ヲ經タル上各別ノ公文交換
ヲ以テ右加入ヲ承認スルコトト為シテ差支ナシ尤モ其ノ
場合ニハ對米回答文ノ内容ニ付打合ヲ為シ置クコト必要

ニシテ右打合ノ結果ハ成ルヘク勸告ノ形式ヲ以テ署名國
政府ニ送付スルコトト致度シ

二、本件加入ヲ認ムル結果(イ)規程ノ修正ヲ要スル点(ロ)米國
ニ對シ他ノ署名國ノ有セサル特殊地位ヲ与フルコトトナ
ル点及(ハ)米國ノ留保ニ對シ解釈ヲ付スルヲ要スル点カ何
レナリヤヲ明ニスルト共ニ之カ処理方法ヲ考究スルコト
ト致度シ

三、尚重要ナル事項ニ付テハ其ノ都度請訓アリ度シ
參考トシテ在仏、伊、白各大使在瑞典公使及杉村局長ニ暗
送アリタシ

490 昭和4年3月5日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

ルートによる米国の常設国際司法裁判所加入

に関する議定書修正案の提示について

別電 昭和四年三月六日付在ジュネーヴ佐藤連盟事

務局長より田中外務大臣宛第二八号

一九二六年裁判所加入國會議議定書第四條に
關するルート修正私案要旨

ジュネーヴ 3月5日後発
本省 3月6日後着

第二七号

巴里發往電第一二三号ニ関シ

杉村公使ヨリノ内報ニ依レハ「ルート」ハ四日「ドラモン
ド」ヲ往訪シ米國今期議會ハ四月ヲ以テ閉會シ十一月ナラ
テハ再開セラレサルニ付是非共今次理事會中ニ米國ノ司法
裁判所加入問題ノ解決ヲ希望ストテ一九二六年九月裁判所
加入國會議ノ作成セル議定書第四條ノ修正案トシテ別電第
二八号ノ如キ趣旨ノ草案ヲ提出シ今次理事會ニ於テ右ニ對
スル同意ヲ得ル様同總長ノ斡旋方ヲ依頼セル趣ナリ同案ノ
處理方ニ関シテハ目下連盟事務局側ニ於テ研究中ニシテ各
大國代表部トモ内々協議シ居ル現狀ニ付(同案ハ大國側ニ
ノミ内示セラレ居レリ)何等成案ヲ見ルニ至ラハ追報致ス
ヘキモ右不取敢

別電ト共ニ米へ転電シ英、仏、独、伊へ暗送セリ

(別電)

ジュネーヴ 3月6日前発

第二八号

一、米國ヲ当事国トスル紛争ニ付テハ裁判所ハ米國ノ同意ナクシテ勧告の意見ヲ表明スルコトヲ得ス

二、米國ヲ当事国トセサルモ同国力害關係アリト主張スル紛争又ハ問題ニ付又同シ此ノ場合合同国力害關係アリト主張スルヤ否ヤ及勧告の意見及請求ニ同意スルヤ否ヤヲ明カナラシムル方法トシテ(イ)理事会(又ハ總會)ハ勧告の意見ノ請求ニ先立チ何時ニテモ米國トノ間ニ意見ノ交換ヲ行フコトヲ得ヘク又(ロ)裁判所カ既ニ右請求ヲ受ケタル場合ニハ裁判所書記ヨリ之ヲ米國ニ通知シ同国力害關係ヲ与ヘサル時ハ裁判所ノ手續キヲ停止シテ同国力害關係(又ハ總會)トノ間ニ意見交換ヲ行フコトトス

三、右(イ)及(ロ)ノ場合ニ於ケル意見交換ノ結果米國カ利害關係ヲ有スルヤ否ヤニ関シ協定成立セス米國ノ不同意ニ拘ラス該問題カ裁判所ニ付託セラルルコトナリ米國モ亦該問題ノ付託カ全般ノ福利ノ為極メテ重要ナルコトヲ認識シテ特ニ不同意ヲ撤回スルニ至ラサル時ハ本規定ハ茲ニ所期ノ目的ヲ達成シ得サルニ至レルモノト認メ議定書

491 昭和4年3月9日 在ジュネーヴ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

米國の加入問題を裁判所規定審査委員会で討議せしめる旨の連盟理事会決議について

ジュネーヴ 3月9日後着
本省 3月10日後着

第三一号

往電第二七号ニ関シ

「ドラモンド」ヨリ「ルート」ニ対シ「ル」提案ハ同人ノ私案トシテ提出セラレタルモノナルヲ以テ其ノ儘之ヲ理事会ニ上程スル事困難ナル次第ヲ説明シタル結果「ル」ヨリ米國政府ノ訓令ヲ求メタル趣ナルカ一方理事中ニハ何等カノ名義ニテ是非トモ本件ヲ上程セムト希望スル者相当多カリシ処偶(或ハ「ル」)請訓ノ結果ナルヤモ知レス)米國政府ハ七日在瑞西公使ヲ通シ二月二十日國務長官ヨリ在華府各国外代表者ニ送付セル書翰ト同一内容ノ書翰ヲ事務局長ニ通告シ来レルヲ以テ九日理事会ノ席上英國理事ハ本件書

ニシテ

(一)ニ関シテハ寿府發往電第二七号「ルート」案ヲ基礎トシテ討議シ連盟國側委員及米國委員ノ双方ニ相当議論アリタルカ米國加入ノ結果連盟ハ毫モ米大陸ニ於ケル米國ノ政策ニ干渉セス又米國ハ連盟ノ活動ヲ妨害スルノ意思ナキコト明白ニセラレタル結果妥結ヲ見ルニ至リ「ルート」案及一九二六年規定署名国会議作製ノ議定書案全部ニ修正ヲ加ヘテ一ノ新議定書案ヲ起草セリ六月理事会ニ於テ本案承認ノ上ハ規定署名國及米國ニ之ヲ送付シ是等諸國中ニ異議アレハ更ニ署名国会議ヲ開クヘク又異議ナクハ九月總會中直ニ新議定書ノ署名ヲ開始スルコトナルヘシ

(二)ニ関シ規定改正ニ決セル主要ナル点ハ(イ)裁判官推薦資格(ロ)裁判官ノ兼職禁止(ハ)裁判官數ノ變更(ニ)備裁判官ヲ廃止シ正式裁判官ヲ十五名ニ増加ス(三)係争当事國国籍ヲ有スル裁判官ノ出席制度ノ擴張等ニ関スルモノニシテ右ノ外(ニ)ニ関連シ英國委員ヨリ「ドミニオン」裁判官出席ニ関スル提案アリタルモ此ノ点ハ何等決定ニ至ラザリキ右改正規定案ハ六月理事会ヲ經テ事務局總會ノ議ニ付セ

翰ヲ引用シ来ル十一日ヨリ開催ノ裁判所規定審査法律家委員會ヲシテ米國加入問題ノ現状ヲ審議シ該加入促進ノ提案ヲ為サシムル趣旨ノ決議案ヲ提出シ各理事何レモ同國ノ加入ヲ切望スル旨ヲ声明シテ之ヲ可決スルト共ニ本理事会ノ議事録ヲ米國政府ニ送付スル事ニ決セリ

米ニ転電シ英、独、伊ニ暗送セリ

492 昭和4年3月25日 在パリ佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛(電報)

裁判所規定審査委員会による米國加入問題に關する新議定書案の起草について

付記 米國加入に關する新議定書案

パリ 3月25日後着
本省 3月26日前着

第三一号

往電第一三号及寿府發往電第三一号ニ関シ
裁判所規定再審査委員會十一日ヨリ十九日迄伊國「シヤロア」議長ノ下ニ寿府ニ開催議題ハ(一)米國ノ裁判所加入ニ関スル二月二十日付「ケログ・ノート」(二)規定再審査ノ二項

ラレタル上各国之ニ署名スルノ段取ナラン

委細郵報ス

米、蘭ノ暗送セリ

(付記)

**Accession of the United States of America to the
Protocol of Signature of the Statute of
the Permanent Court of International Justice.**

DRAFT PROTOCOL.

The States signatories of the Protocol of Signature of the Statute of the Permanent Court of International Justice, dated December 16th, 1920, and the United States of America, through the undersigned duly authorised representatives, have mutually agreed upon the following provisions regarding the adherence of the United States of America to the said Protocol subject to the five reservations formulated by the United States in the resolution adopted by the Senate on January 27th, 1926.

Article 1.

The States signatories of the said Protocol accept the special conditions attached by the United States in the five reservations mentioned above to its adherence to the said Protocol upon the terms and conditions set out in the following Articles.

Article 2.

The United States shall be admitted to participate, through representatives designated for the purpose and upon an equality with the signatory States Members of the League of Nations represented in the Council or in the Assembly, in any and all proceedings of either the Council or the Assembly for the election of judges or deputy-judges of the Permanent Court of International Justice, provided for in the Statute of the Court. The vote of the United States shall be counted in determining the absolute majority of votes required by the Statute.

Article 3.

No amendment of the Statute of the Court may be

made without the consent of all the Contracting States.

Article 4.

The Court shall render advisory opinions in public session after notice and opportunity for hearing substantially as provided in the now existing Articles 73 and 74 of the Rules of Court.

Article 5.

With a view to ensuring that the Court shall not, without the consent of the United States, entertain any request for an advisory opinion touching any dispute or question in which the United States has or claims an interest, the Secretary-General of the League of Nations shall, through any channel designated for that purpose by the United States, inform the United States of any proposal before the Council or the Assembly of the League for obtaining an advisory opinion from the Court, and thereupon, if desired, an exchange of views as to whether an interest of the United States is affected shall proceed with all convenient speed between the

Council or Assembly of the League and the United States.

Whenever a request for an advisory opinion comes to the Court, the Registrar shall notify the United States thereof, among other States mentioned in the now existing Article 73 of the Rules of Court, stating a reasonable time-limit fixed by the President within which a written statement by the United States concerning the request will be received. If for any reason no sufficient opportunity for an exchange of views upon such request should have been afforded and the United States advises the Court that the question upon which the opinion of the Court is asked is one that affects the interests of the United States, proceedings shall be stayed for a period sufficient to enable such an exchange of views between the Council or the Assembly and the United States to take place.

With regard to requesting an advisory opinion of the Court in any case covered by the preceding paragraphs,

there shall be attributed to an objection of the United States the same force and effect as attaches to a vote against asking for the opinion given by a Member of the League of Nations in the Council or in the Assembly.

If, after the exchange of views provided for in paragraphs 1 and 2 of this Article, it shall appear that no agreement can be reached and the United States is not prepared to forgo its objection, the exercise of the powers of withdrawal provided for in Article 8 hereof will follow naturally without any imputation of unfriendliness or unwillingness to co-operate generally for peace and goodwill.

Article 6.

Subject to the provisions of Article 8 below, the provisions of the present Protocol shall have the same force and effect as the provisions of the Statute of the Court and any future signature of the Protocol of December 16th, 1920, shall be deemed to be an acceptance of the provisions of the present Protocol.

Article 7.

The present Protocol shall be ratified. Each State shall forward the instrument of ratification to the Secretary-General of the League of Nations, who shall inform all the other signatory States. The instruments of ratification shall be deposited in the archives of the Secretariat of the League of Nations.

The present Protocol shall come into force as soon as all States which have ratified the Protocol of December 16th, 1920, and also the United States, have deposited their ratifications.

Article 8.

The United States may at any time notify the Secretary-General of the League of Nations that it withdraws its adherence to the Protocol of December 16th, 1920. The Secretary-General shall immediately communicate this notification to all the other States signatories of the Protocol.

In such case, the present Protocol shall cease to be in

force as from the receipt by the Secretary-General of the notification by the United States.

On their part, each of the other Contracting States may at any time notify the Secretary-General of the League of Nations that it desires to withdraw its acceptance of the special conditions attached by the United States to its adherence to the Protocol of December 16th, 1920. The Secretary-General shall immediately give communication of this notification to each of the States signatories of the present Protocol. The present Protocol shall be considered as ceasing to be in force if and when, within one year from the date of receipt of the said notification, not less than two-thirds of the Contracting States other than the United States shall have notified the Secretary-General of the League of Nations that they desire to withdraw the above-mentioned acceptance.

Done at Geneva, the () day of September, nineteen hundred and twenty nine, in a single

copy, of which the French and English texts shall both be authoritative.

493 昭和4年4月5日 在米国外務大臣宛より

米国の国際司法裁判所加入新議定書案に対する

米国外務大臣宛

普通公第二三三八号 (5月1日接受)

昭和四年四月五日

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

米国外務大臣宛 田中 義一殿

本件ニ関シテハ二月十五日付拙信公第一一二二号ヲ以テ報告シ置キタル次第アリ尚右加入問題ニ関スル二月十九日付國務長官公文及「フーバー」大統領カ三月四日其ノ就任演説中ニ於テ本問題ニ言及セルコト等夫々報告申進メノ通りナル処其後「ルート」氏ノ寿府ニ於ケル折衝ノ成行並ニ其ノ結果タル新議定書案ノ内容等詳細ニ各新聞紙ニ報道セラレ

各方面ニ相当大ナル注意ヲ喚起シ居ルモノノ如シ

右ニ関シ華府発新聞通信等ノ報スル所ニ依レハ國務省其他官辺ニ於テハ新議定書案ニ対シ大体ノ所賛意ヲ表シ居ルヤノ趣ニテ就中三月十九日紐育「タイムス」華府特電ハ「ルート」カ連盟ニ提出セル原案ニ対シテハ「クリーツヂ」「フーバー」新旧大統領共予メ同意ヲ与ヘタル由ナルカ新議定書案ハ右「ルート」提案ト大差ナク從テ政府側ニテハ異存ナキ模様ナリト報シ居レリ

然ルニ議會方面ニテハ偶々閉会中ニテ多数議員ハ華府ヲ離レ居ル処予テ米国ノ國際司法裁判所加入ニ反対意見ヲ抱キ居ル向ニテハ早くモ新議定書案ニ対シ非難ヲ加ヘ居リ就中上院外交委員長「ボラー」氏ハ三月十九日声明書ヲ發シテ「自分ハ未タ新議定書案ヲ研究シ居ラサルニ付最終的ノ意見ヲ發表スル訳ニハ行カサルモ兎ニ角同司法裁判所カ単ニ司法的並ニ仲裁的ノ機能ヲ行フニ止ルニ於テハ之カ加入ニ何等留保ヲ付スル必要ナク又同裁判所ノ勧告トモ右カ利害關係國ノ請求ヲ俟テ行ハルモノナラハ必スシモ反対スルヲ要セサルモ現状ニテハ國際連盟ニ於テ直接同裁判所ニ対シ各種問題ニ関スル勧告ヲ求メ得ヘキコトトナリ居リ云

ラルド・トリビューン」ノ二大新聞紙ハ前記二月十九日付「ケロッグ」公文公表ノ際何レモ右從來ノ態度ヲ反映セル社説ヲ掲ケタル以後今日迄沈黙ヲ守リツツアリ」其ノ中華府「ポスト」紐育「サン」市俄古「トリビューン」並ニ「ハースト」系ノ諸紙ハ大体前記「ボラー」「ジョンソン」ノ意見ト同趣旨ニ依リ新議定書案ニ反対シ殊ニ脱退問題ニ関シ新議定書ハ米国側カ脱退權ヲ行使スル場合ニ於テモ之ヲ非友誼的行為ト認メサル旨ヲ定メ居ル処右ハ規定面丈ケノコトニシテ實際問題トシテハ前掲「ジョンソン」意見ノ如ク脱退不可能ナルカ又ハ強テ之ヲ決行スレハ世界各国ノ反感ヲ買フ結果トナルヘク旁々初メヨリ加入セサル方カ得策ナリトナシ尚米国ノ國際司法裁判所加入ハ其ノ連盟参加ノ導因トナル虞アルコトト同裁判所ハ連盟ト均シク欧州諸國ノ利己的機關ナルコト等ヲ述ヘ「ハースト」系新聞紙ノ如キハ米国ノ同裁判所加入ハ即チ同國ノ自主独立ヲ喪失スル所以ナリトシ居レリ右ニ対シ「ウォールド」「ブルツクリン・デーリー・イーグル」「ボルチモア・サン」費府「インクワイヤラー」等ハ熱心ニ新議定書案ヲ支持シ米国ノ國際司法裁判所加入ハ同國主唱ノ下ニ締結セラレタル不戰條

ハハ同裁判所ハ政治団体タル連盟ノ手先ナルカ故ニ米國トシテハ之カ加入ニ付慎重考慮ヲ要スル次第ナリ」ト述ヘ又加州選出上院議員「ハイラム・ジョンソン」氏ハ同月三十一日声明書ヲ發シ「米國ヲ國際司法裁判所ニ引キ込マントスル策動又モ台頭シ来レル処新議定書案ハ「ルート」提案ト全然別物ナリ」ト斷シタル後米國ノ同裁判所脱退問題ニ言及シ「米國側ニ於テ右脱退權ヲ行使セムトスル場合ニハ内外ノ反対轟然トシテ起リ脱退ハ事實上不可能トナルヘシ」ト主張シ尚米國カ世界ノ債權國タリ又世界各国ニ愛好セラレ居ラサルコト等ヲ列挙シ「同裁判所ト雖モ人間タル以上愛國心モアルヘク同情心モ有スヘシ」トテ同裁判所ノ決定カ米國ニ取り不利ナルヘキコトヲ仄カシ最後ニ「米國カ同裁判所ニ加入セサル為メ自國並ニ世界人類ノ為メ何等失フ所ナキノミナラス同國カ軍備制限其他各般ノ有益ナル國際的事業ヲナシ得タルハ其行動ノ自由ヲ保有シタル賜ナリ」ト結ヘリ

叙上ノ次第ナル処本件ニ関シ各新聞紙共數回ニ亘リ社説ヲ掲ケ論評ヲ加ヘ居リ（尤モ予テ米國ノ同裁判所加入ニ賛成シ居ル紐育「タイムス」及之ト反対ノ傾向ヲ執レル同「ヘ

約ノ当然ノ歸結ナルコト新議定書案ハ米國留保條件第五項ニ対シ何等實質的變更改ヲ加ヘ居ラス「ボラー」「ジョンソン」等ノ反対論ハ何等合理的根拠ナク結局彼等ハ米國ノ同裁判所加入ヲ無暗ニ反対スルカ又ハ國際連盟問題ノ行懸上ヨリ感情論ニ捉ハレ居ルモノナルコト脱退權ノ規定ニ依リ米國ノ權益ハ充分ニ保護セラレ居ルノミナラス米國ニシテ一旦之ニ加入セル以上ハ米國側モ連盟側モ米國ノ脱退ヲ余儀ナクスルカ如キ事態ノ發生ヲ避免スルニ努ムヘク斯クテ其ノ運用宜シキヲ得ルニ於テハ上院側ノ抱ケルカ如キ疑惑ノ杞憂ニ過キサリシコト判明シ万一解決困難ナル紛議發生スルモ米國輿論ハ脱退ニ反対スルニ至ルヘキコト等ヲ述ヘ居レリ

右ノ外華府「スター」「クリスチアン・サイエンス・モニトア」「ポストン・トランスクリプト」「ヂャーナナル・オヴ・コムマース」「ウォール・ストリート・ヂャーナナル」費府「レツヂャー」同「レコード」等モ亦大体ニ於テ新議定書案ニ賛意ヲ表シ居レルカ二月十一日ノ「ウォール・ストリート・ヂャーナナル」及同二十日ノ「ポストン・トランスクリプト」ハ新議定書案ニ対スル米國上院側ノ反対ハ兎ニ角

トシ米國ニ對シ反感ヲ藏スル南中米諸國ニ於テ之ニ對シ何等異存ナキヤトナシタリ

尚上院ノ形勢ニ付テハ各新聞紙共前記「ボラー」「ジョンソン」等反對論者カ所謂口八丁、手八丁ノ連中ナルニ顧ミ其反對運動ハ議會内外ニ於テ執拗ニ行ハルヘク從テ上院ニ於ケル本件議事ハ相当手間取ルヘシト觀測シ居リ尚賛成論ノ新聞紙中新議定書ノ同院通過ヲ確保スル為メ「フーバー」大統領ノ努力斡旋並ニ一般民論カ反對派議員等ニ圧迫ヲ加フルコト肝要ナリトナスモノ少ナカラス

右關係新聞切抜添付報告申進ス

本信写送付先 在巴里國際連盟帝國事務局長

494 昭和4年5月14日 在巴里佐藤連盟事務局長より
田中外務大臣宛

裁判所規程審査委員會の討議状況について

機密連本公第三一二号 (6月5日接受)

昭和四年五月十四日

在巴里

國際連盟帝國事務局長 佐藤 尚武 (印)

第一ノ困難ニ關シテハ「ケログ」書信(米國々務卿ヨリ在米各國使節ニ交付セルモノ)ニヨリ米國ハ上院ノ留保ヲ主張スルモ右ニ依リ何等連盟ノ活動ヲ防止スル意思ナキ旨ノ明言ヲ得タルニ依リ之ヲ除外シ得タルカ第二ノ困難ニ關シテハ英、伊兩國委員ヨリ相当異論ヲ主張シ結果米國ヲ他國ト同様ノ地位ニ置クコトニ「ルース」案ヲ改正シ委員會ノ承認ヲ得ルコトナレリ

本問題討議中「ルース」氏カ會議劈頭戰後米國ヲ除キタル他國ハ連盟ヲ組織シ從來ノ外交方法ニ多大ノ改良ヲ加ヘタルニモ拘ラス米國ハ依然トシテ旧式外交方法ヲ繼續シ居ル為メ兩者ノ間ニ何等カ橋ヲ架クル必要アリ上院留保ノ承認ノ如キモ其必要ヨリ出テタルニ外ナラス自國外交方法ノ旧式ナルコトヲ批評シ唯連盟對米國間ニ國際司法裁判所ニ關スル限り協力ヲ為シ得ル為メ事實上何等方法ヲ講スルノ必要アルコトヲ高調シ委員會ノ了解ヲ求メタルハ多大ノ感動ヲ与ヘタリ「ルース」氏カ小官ニ語ル処ニ依レハ米國カ新式外交方法ヲ採用シ得サルハ上院ノ存在ニ原因シ上院ノ存在ハ合衆國憲法ニ依リ各「ステート」カ對外主權ヲ中央政府ニ委シタルヨリ生シタルモノ

外務大臣男爵 田中 義一殿
常設國際司法裁判所規程審查法律委員會ニ關スル感想等報告ノ件

本年三月府府ニ開催ノ本件委員會經過ニ關シテハ三月二十九日付機密連本公第二三一号ヲ以テ報告致置タル処右拙信未段申進ノ通本委員會ニ現ハレタル各般ノ空氣及之ニ對スル感想ニ關シ伊藤委員ヨリ別紙ノ通報告書提出アリタルニ付右茲ニ進達ス御査閱相成度シ

本信写送付先 在米大使、在蘭公使

(別紙)

(一)議題中米國ノ國際司法裁判所加入問題ニ關シテハ「ルース」氏自ラ各方面ト接觸ヲ保チ一九二六年ノ上院留保ノ承認ヲ求ムルニ尽力シタルモ委員中米國ノ為メニ國際連盟ノ活動ヲ防止セラル如キ結果ニ至ルコトヲ好マサルモノアルノミナラス(例ヘハ諾威委員ノ如キ)裁判所問題ニ關シテハ米國ニ優越的地位ヲ与フルハ法律上ニ於ケル各國平等ヲ害スルモノトシテ必スシモ賛成セサルモノアリ(例ヘハ英、伊委員ノ如キ)タルヲ以テ「ルース」案ノ承認ニハ相當困難アリタリ

ニシテ米國ノ關スル限り現在ノ政體ヲ以テシテハ殆ント改正ノ見込ナキ点ナリト

(二)裁判所規程改正ニ關シテハ昨年ノ總會ニ於ケル決議案カ仏國側ヨリ出テタルニ鑑ミ討議ハ主トシテ仏國委員ノ提案ヲ基礎トシテ為スコトナレリ
仏國委員ノ提案ハ左ノ諸点ニ關スル改正ヲ主張スルニアリタリ

(イ)裁判官ノ資格 (ロ)裁判所ノ活動 (ハ)裁判所ノ判決
(ニ)裁判官ノ資格ニ關シテハ仏、伊兩國委員ヨリ現在ノ制度ニ關シ相當非難アリタルカ其ノ主要点ハ國際法上ノ爭議ハ單ナル國內法上ノ爭議ト性質ヲ異ニスルヲ以テ之カ取扱ニ關シテモ其ノ趣ヲ異ニセサルヘカラス即チ國際法ノ規定ナルモノハ單ニ純理ニ依リ成立セルモノニアラスシテ各國ノ利害關係ヲ折衷調和シ出来上リタルモノニシテ之ニ關スル爭議ヲ裁判スルニ當リテモ此ノ点ニ重キヲ措カサル可ラス單ニ純理上ヨリ國際事件ノ裁判ヲナス如キハ最モ國際法ノ性質ヲ解セサルモノナリ斯ルカ故ニ國際法上ノ爭議ヲ裁判スヘキ地位ニ在ル國際司法裁判所ノ判事ハ單ニ國內裁判官或ハ學者ヲ

以テシテハ右ノ如キ國際爭議ノ性質ヲ解スルコト困難ナルノミナラス往々其ノ判決ニ間違ヲ生スルコト自然ナリ國際司法裁判所ノ判事ハ尠クモ各國間ニ於ケル「デリケート」ナル事件ヲ實際ニ取扱ヒタルモノニシテ國際事件カ如何ニ微妙ニシテ単ニ學理又ハ法文ノ解釈ニヨリ之ヲ決定スルノ不可能ナルコトヲ知ルモノナラサルヘカラス之ノ点ニ於テ現在ノ裁判所判事中單ニ學理ノミヲ攻究スル教授連ノ多キニ對シ相當攻撃ヲ加ヘタリ

(四)裁判所ノ活動ニ関シテハ当初裁判所規程ヲ制定セル時ハ裁判事件数僅少ニシテ毎年夏期休暇中開廷スルヲ以テ充分ナリトノ想像ノ下ニ作成セラレ從テ開廷期ハ夏トシ判事ハ教授弁護士等ノ職務ヲ兼ね得ルコトナリ居レルモ七年間ノ經驗ニヨレハ裁判所ハ殆ント年中開廷ノ必要アルヲ以テ裁判官ハ其ノ職務ヲ忠實ニ実行セントセハ何等他ノ兼職ヲ許サル狀況トナレリ從テ此ノ点ニ於テ規定ノ改正ヲ必要トスルコトハ委員會一致ノ意見ナリ

此ノ意味ニ於テ裁判官ノ兼職ヲ嚴禁スルト同時ニ裁判

官ノ手当方法ヲモ改正スルコトナレリ討議中現在ノ如ク裁判官カ大学教授トシテ毎年國際法ノ講義ヲナスコトニ関シ頗ル非難多ク出席セル裁判所長、次長モ(兩人トモ大学教授)右ニ對シテ賛意ヲ表示シタリ

(五)裁判所ノ判決ニ関シテハ英、仏委員ヨリ相當非難多ク仏國委員ハ現在ノ如キ少数意見ノ發表ニ反對シタルモ委員會ニ於テ採用セラレス英國委員ハ從來ノ判決カ各判事ノ意見折衷ノ如クナリ法律上ノ權威ヲ失スルコトヲ指摘シ判決主文ヲ除キ理由ハ全部別ニ發表スルコトヲ主張シタルモ之又委員會ニ於テ採用セラレス伊國委員ハ現在ノ判決カ恰モ教科書ノ如クシテ無用ノ文句尠カラス判決ハ單ニ裁判事件ノ關スル裁判所ノ意見ノミヲ包含スルヲ以テ充分ナリトシ現在ノ制度ヲ尠ナカラス非難シ各委員ノ贊同スル処トナリタルモ右ノ為メニ規定ノ改正ヲ必要トセサルヲ以テ單ニ裁判所ノ注意ヲ惹クヲ以テ足レリトセリ

(三)裁判所規程改正ニ関シテハ右ノ如ク現在ノ判事カ學者又ハ國內裁判官ニシテ國際問題ヲ實際ニ取扱ヒタルコトナキ者多キ為メ判決ハ唯學理的トナリ以テ國際事件ノ性質

ヲ無視スル如キ場合アルニ對スル非難ヲ中心トシ議論セラレタルノミニシテ委員會ノ採用セル規程改正ノ主眼点モ裁判官資格問題ニ在リ右ニヨリ次期改選ニ際シ各國ヨリ推薦スヘキ候補者ニ制限ヲ加ヘントノ趣旨ヲ有ス追テ右種ノ「デリケート」ナル議論ハ議事録ニ挿入セサルコトトナシタリ

495 昭和4年9月7日 在米國出淵大使より 幣原外務大臣宛

裁判所加入国會議でのルート案採択に関する

米國國務長官の声明について

普通公第五八〇号 (10月12日接受)

昭和四年九月七日

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

米國ノ國際司法裁判所加入問題ニ關スル件

本件ニ付テハ本年四月五日付拙信普通公第二三八号ヲ以テ報告シ置キタル次第アル処九月四日寿府発新聞電報ハ同日

國際司法裁判所加入国會議ニ於テ米國ノ同裁判所加入問題ニ關スル所謂「ルート」案ヲ受諾シ之ヲ連盟總會ニ報告スルコトヲ決議セル旨並ニ總會カ同案ヲ受託スヘキコト確實ト認メラル旨ヲ報スルト共ニ加入国會議秘密會ニ於テ連盟事務總長「ドラモンド」ヨリ米國國務長官カ同案ニ贊成シ居ル旨ノ確報ニ接シ居レリトノ趣旨ヲ披露セル由ヲ報シタルカ超エテ五日「スチムソン」國務長官ハ新聞記者團ヲ引見シ口頭ヲ以テ左記要領ノ声明(別紙甲号)^(省略)ヲナシタル趣ナリ

予ハ「ルート」案ニ對シ慎重審査ヲ加ヘタルカ同案ハ上院ノ提起セル反對ヲ容レタルモノニシテ同院ノ予見スルカ如キ危険ニ對シ米國ニ充分ナル保障ヲ与フルモノト認メラレタリ仍テ去年予ハ連盟事務總長ニ對シ予トシテハ「ルート」案ニ贊成ナル旨並ニ他ノ諸國カ同案ヲ受諾スルニ於テ予ハ大統領ニ對シ同案ニ調印スヘキコト並ニ右批准ニ關スル上院ノ協賛ヲ求ムヘキコトヲ稟申スヘキ旨ヲ通報セリ

尚同日國務省ヨリ本件ニ關スル左記文書(別紙乙、丙、丁号)^(省略)公表セラリタリ

一、連盟事務総長発在瑞西米国公使宛一九二九年五月二日付非公式通牒

二、同事務総長発米国國務長官宛同年六月十二日付公文
三、在瑞西米国公使發連盟事務総長宛同年八月十四日付

「エード・メモアール」

右ニ関シ九月五日華府發新聞通信ハ「ルート」案ト國際司法裁判所加入国全部ノ批准ヲ完了シ米国上院ニ提出セラルル迄ニハ少ク共一個年ヲ要スルヘキ処國務省側ニ於テハ從來米国ノ加入ニ反対シ居ル現上院議員中時日ノ経過ニ伴ヒ其ノ態度ヲ緩和シ来レルモノモアリ又一九三〇年同院議員三分ノ一改選ニ依リ新議員モ出ツヘク旁々上院ハ結局ニ於テ同案ニ対シ協賛ヲ与フヘシト觀測シ居ル趣ヲ報シタルカ一方「ボラー」「モーゼス」「ハイラム・ジョンソン」等ハ依然トシテ強硬ナル反対ノ態度ヲ持シ居リ形勢必スシモ樂觀ヲ許サスト報スルモノアリ將又九月六日ノ費府「レッヂャー」同「インクワイヤラー」「ボルチモア・サン」等社説ヲ掲ケ同案ニ対シ賛意ヲ表シツツモ上院ノ加入反対論者ハ種々ナル口実ヲ見付ケテ同案ノ打潰ニ努力スヘク少ク共同院ニ於ケル本件討議ノ長引クコトハ予期シ置カサルヘカ

署名シタル国名左ノ通り

豪州、澳太利、英吉利、「ブラジル」、勃牙利、加奈陀、智利、支那、玖馬、「チエッコスロヴァキア」、丁抹、「エストニア」、芬蘭、仏蘭西、独逸、希臘、印度、愛蘭自由国、伊太利、「ラトヴィア」、白耳義、蘭国、「ニュー・ジラランド」、諾威、波蘭、葡萄牙、「ユーゴスラビア」、暹羅、西班牙、瑞典、瑞西、「ウルグアイ」、「ヴェネツエラ」、「ドミニカ」、「ボリビア」、「ガテマラ」、「ハイチ」、「リベリア」、「ルクセンブルグ」、「ペルー」、「パナマ」

右報告ス

本信写送付先 在米大使

497 昭和4年12月12日 在米国出淵大使より
幣原外務大臣宛

常設國際司法裁判所加入議定書に米国代表調

印について

機密公第七六八号

昭和四年十二月十二日

在米

(昭和5年1月25日接受)

ラストノ趣旨ヲ述ヘ居レリ
右報告申進ス

本信写送付先 在寿府國際連盟帝國事務局長

496 昭和4年9月21日 在ジュネーヴ吉田公使より
幣原外務大臣宛

米国の常設國際司法裁判所加入に関する議定書に調印について

無号

(10月28日接受)

昭和四年九月二十一日

在寿府

常設國際司法裁判所規定改正ニ関スル

國際會議日本委員

特命全權大使 吉田 伊三郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

常設國際司法裁判所米国加入ニ関スル議定書

調印ノ件

本件ニ関シ寿府三全權宛貴電第九号ヲ以テ御訓令ノ次第敬承依テ本日右議定書ニ署名シタリ尚本官署名前ニ代表者ノ

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

米国の國際司法裁判所加入調印完了方ニ関スル件

米国ノ國際司法裁判所加入問題ノ経緯ニ関シテハ累次報告シ置キタル次第アリ將又本年十二月三日「フーヴァー」大統領ヨリ議會ニ送レル教書中同裁判所構成ニ関スル議定書カ上院ノ留保ニ沿フ様修正セラレタルヲ指摘シ米国代表者ニ対シ加入調印方ヲ命スヘキ旨ヲ述ヘタルコトニ付テハ當時電報シ置キタル通りナリ

然ルニ十二月九日在瑞西米国代理公使ハ寿府ニ於テ(イ)國際司法裁判所構成ニ関スル議定書(ロ)右構成法修正ニ関スル議定書及(ハ)米国ノ同裁判所加入ニ関スル議定書ニ調印ヲ了シタル趣ニテ同日國務省ヨリ其ノ旨發表セラレタリ尚國務省公表ノ關係書類ニ依レハ國際連盟事務総長ヨリ國務長官ニ対シ十月七日付書面(別紙甲号)ヲ以テ九月十四日連盟總會ニ於テ本件ニ同意ヲ与ヘタル旨ヲ通報シ越シ次テ國務長官ヨリ大統領ニ対シ十一月十八日付書面(別紙乙号)ヲ以テ本問題從來ノ経緯ヲ詳述シタル後國際司法裁判所構成ニ

関スル議定書ノ修正ニ依リ米國ハ安シテ同裁判所ニ加入シ得ルコトナリタルニ付在瑞西米國代表者ニ対シ前記三個ノ議定書ニ調印スルノ権限ヲ与ヘラレ度旨ヲ進言シ之ニ対シ大統領ヨリ同月二十六日付書面(別紙丙号)^(五)ヲ以テ右長官ノ進言ヲ容レ在瑞西米國代理公使ニ調印ノ全權ヲ付与スル旨指示タル次第ナリト云フ

紋上ノ成行ニ関スル当國新聞論調ハ華府「ポスト」紐育「サン」及「ハースト」系諸新聞等米國ノ加入ニ反対シ居ル一方紐育「タイムズ」「ウォールド」紐育「ヘラルド・トリビューン」費府「レッヂャー」同「レコード」「ボルチモア・サン」同「イヴニング・サン」華府「スター」等今回ノ修正ニ依リ米國側利益ハ安全ニ保証セラレ居レリトナシ大體從來ノ「ライン」ニ依ル論旨ヲ繰返シツツアリ尚上院ニ於ケル本問題ノ運命ニ関シテハ同院ニ於ケル加入反対論ノ急先鋒タル「ボラー」「ハイラム・ジョンソン」「モーゼス」等(何レモ共和党)修正議定書ヲ以テ不充分ナリトナシ依然米國ノ加入ニ反対ノ意向ヲ有スルヤノ趣ナルノミナラス下院外交委員長「ボーター」(共和党)ノ如キハ既ニ公然反対論ヲ唱ヘ出シタル位ニ付本問題上院付議ノ上ハ相当ノ論戰

第一〇八号

常設國際司法裁判所ニ関スル規程改正及米國加入ノ兩議定書本月二十一日御批准ヲ經タリ右ノ趣連盟事務総長ヘ通告アリ度

尚公布ノ都合モアルニ付規程改正ニ関スル議定書カ九月一日ニ実施セラルルノ見込如何ニ付御取調ノ上至急回電アリタシ

(付記)

常設國際司法裁判所規程改正ニ関スル議定書及亜米利加合衆國ノ常設國際司法裁判所規程ニ関スル署名議定書ヘノ加入ニ関スル議定書御批准ノ枢密院審査委員會議事概況

昭和五年八月二日午前九時十分開會

出席者

枢密院側

倉富、平沼正副議長、富井委員長、松室、荒井、鎌田、石井、水町、岡田各委員、二上書記官長及村上、堀江、武藤各書記官

行ハルヘキモ結局ニ於テ同院ノ協賛ヲ得ヘキコト大體確實ナルヤニ見ルモノ多シ尤モ本期議會ニハ各種重要議案錯綜シ居ルコトニモアリ又此ノ際政府側ヨリ本件議定書ノ上院通過ヲ計ルニ於テハ左ナキタニ関稅問題等ニ関連シ發生セル共和党内ノ不和ヲ一層激成スルコトナルノ虞アリテ一九三〇年秋期上下兩院議員選舉ヲ差控ヘ面白カラストナス向モアリ旁々政府ハ本件上院付議ヲ右選舉終了後即チ同年十二月開會ノ次期議會迄持チ越スナラント觀察スルモノアリ

右報告申進ス

本信写送付先 在英、仏、伊、白、独、露各大使及國際連

盟事務局長

498

昭和5年8月22日

幣原外務大臣より 在バリ佐藤連盟事務局局長宛(電報)

米國の常設國際司法裁判所加入に関する議定書の批准について

付記 昭和五年八月二日枢密院審査委員會議事概況

本省 8月22日後發

政府側

幣原外務大臣、川崎法制局長官、松永条約局長、金森法制局參事官、斎藤事務官

富井委員長 手續上ノ問題ノ為審査委員會ノ開催遅延セル事情ヲ述ヘ外務大臣ノ説明ヲ求ム

幣原大臣 先ツ裁判所規程改正ニ関スル議定書ニ付大體別添ノ説明原稿ニ基キ開陳シ併テ規程改正ノ内容ニ言及ス次テ亜米利加合衆國ノ裁判所加入ニ関スル議定書ニ付略々別添原稿ノ通説明シタル後合衆國ノ裁判所加入力從来トモニ欧州ニ於ケル政治家学者等ノ間ニ熱望セラレ居ル事情ヲ紹介シ更ニ合衆國ノ加入ハ裁判所ノ構成ヲ増進スル為最好マシキ次第ナル所以ヲ付言セリ又兩議定書ノ可分ナルヤ不可分ナルヤニ付問題アル由ヲ聞及ヘルカ兩議定書ハ理論上可分ノ取扱ニ出ツルコト不可能ニ非ス現ニ白耳義ノ如キハ其ノ理由不明ナルモ規程改正ニ関スル議定書ノミニ付批准寄託ヲ行ヒ他ハ未タ同様ノ措置ニ出テサルカ如キ例アリ但シ實際上ノ措置トシテハ兩議定書ヲ同時ニ批准スルコト望マシク合衆國ノ批准前ニ帝國ノ批准アリトスルモ右ハ寧ロ合衆國ノ加入ヲ「エンカレジ」

スルモノト観テ政策上妥当ナリト信スル旨ヲ述ヘタリ

松永局長 両議定書ニ対スル列国ノ批准書寄託状況ニ付説明シ七月十日現在ニ於テハ批准書寄託国ハ十数国ニ過サルモ調査ノ結果九月一日迄ニハ尚十数国ヲ加ヘ尚調査洩ノ十数国中ニモ前同様ノ措置ニ出ツルモノナキヲ保セス殊ニ国内手続上九月一日迄ニ批准書寄託不能ノ国アルモ議定書ノ実施ニハ反対セサル模様ナリト付言ス

富井委員長 両議定書ノ可分ナルヤ不可分ナルヤノ問題ニ付テハ尚議論アルヤモ計ラレス然シ右ノ議論ハ合衆国ノ裁判所加入ニ関スル議定書審議ノ際ニ譲リ先ツ規程改正ニ付審査ヲ進メ度

荒井委員 予備裁判官廃止ノ理由、裁判官選挙ノ方法及現任裁判官ノ選出国ニ付質問ス

松永局長 之ニ答弁ス

荒井委員 常時開廷ノ理由ニ付質問ス

松永局長 之ニ答弁ス

富井委員長 之ニ和シテ裁判所内ノ事務輻輳ニ付一言ス

鎌田委員 裁判所非加入国モ裁判官選出ヲ可能トスルヤニ付質問ス

富井委員長 選択条項ノ受諾カ早キニ及テ実現スルコトハ

最希望セラルル次第ナルカ政府カ受諾ヲ躊躇スル点ハ寧ロ対支問題ニ非サヤト述ヘタリ

幣原大臣 対支問題ニ関シテハ寧ロ樂觀ヲ唱ヘ家屋税問題ノ仲裁々判ニ敗訴セル後帝国カ此ノ種ノ解決方法ヲ嫌厭スルニ到リタル如シト付言セリ

岡田委員 今回御諮詢ノ両議定書ニ付其ノ後多数ノ訂正ヲ見タルハ憂慮ニ堪ヘス之カ理由ヲ求ムルニ近來事務官ノ地位政変毎ニ動揺シ其ノ更迭頻繁ナルコト其ノ一、又政務官カ其ノ分限ヲ越ヘテ事務ニ容喙スル結果事務官ヲシテ執務ニ不熱心ナラシムルコト其ノ二ナルヘシト述フ

松永局長 多数ノ訂正ヲ必要トセシ点ニ付釈明ス

幣原大臣 将来ニ於テ訂正ノ必要ナキ様注意スヘシ但シ理由トシテ挙ケラレタル二点ハ自分ノ主宰スル外務省ニ関スル限り其ノ例ナシト応答ス

富井委員長 正午迄ニ余ストコロ半時間ナルカ審議ノ続行如何ニ付諮リ結局午後二巨ルコトヲ宣ス次テ規程改正ニ関スル議定書ノ逐条審議ニ入ルコトトス

岡田委員 規程改正ハ合衆国ノ裁判所加入ノ実現ヲ前提ト

松永局長 之ニ答弁ス

荒井委員 勧告の意見ニ付説明ヲ求メ理事会ノ審査ト勧告の意見トノ関係ニ付質問ス

松永局長 之ニ答弁ス

幣原大臣 之ニ答弁ス

石井委員 勧告の意見ノ請求ニ当ル理事会内ノ実状ヲ説明シタル後本審査ニハ直接関係ナキモ此ノ機会ニ於テ一言致度トテ政府カ選択条項ノ受諾ニ付如何ナル態度ヲ採リツツアルヤニ付質問ス

幣原大臣 今日迄ニ選択条項ノ受諾カ実現セサリシハ主トシテ米支露ノ現状ニ支配セラレタル結果ナルヘク自分トシテハ寧ロ之カ受諾ニ出ツルコトヲ希望シ居ルモ其ノ影響スル処勢カラサルニ鑑ミ目下事態ヲ静視シテ留保条件ノ研究中ナリト答フ

石井委員 他国トノ振合上帝国カ選択条項ノ受諾ヲ為スコトハ此ノ上ノ遷延ヲ許サス殊ニ裁判所ノ取扱フ問題ハ法律的性質ヲ有スルニ止マルモノナレハ之カ受諾躊躇ノ結果受クル帝国ノ不評判ニ比シ其ノ実現ハ極テ得策ナリト強調ス

セスヤ

富井委員長 両議定書ノ不可分論ノ出ツル所以ナリ

松永局長 理論上両議定書カ可分ナルコトハ先刻大臣ノ説明セル通ニテ合衆国ノ批准カ九月一日迄ニ実現セストモ規程ノ改正ニ反対ノ意向ヲ表明セサル限り議定書条文第四ノ運用ニ依リ規定改正ハ実現ノ可能性ヲ有スルモノト信ス

荒井委員 然ラハ一國ニテモ規定改正ニ異議ヲ含ム場合本議定書ノ運命ハ如何ニ決セラルルヤ

幣原大臣 斯カル場合ニハ理事会ニ於テ何等カノ善後措置ヲ講スルコトトナルヘク折角多数國ノ批准セル本議定書カ死文ニ帰スルコトハ万々アルマシキコトト思考ス

富井委員長 現在ノ規程カ本年末迄運用セラルルニ拘ラス改正規程ノ実施期日ヲ九月一日トナシタルコトノ矛盾ヲ指摘ス

松永局長 右ハ本年九月連盟總會ノ会期中ニ新裁判官ノ選挙ヲ行フ為ニ実施期日ヲ九月一日ニ定メタルモノノ如シト応答ス

富井委員長 規程改正ノ内容ヲ為ス付属書ノ審議ニ入ルコ

トヲ宣ス逐条朗読ノ結果別段ノ質問モ出テス終了ス午後一時午食ノ為休会ス
午後二時再会

富井委員長 規程改正中ノ第四十五条ノ訳文変更ノ件ヲ上程ス

二上書記官長 本件公布ノ取扱振ニ付質問ス

金森参事官 之ニ答弁ス

富井委員長 本議定書ニ関スル御批准書案ヲ朗読セシム
(両件トモ異議出テス)

富井委員長 合衆国ノ裁判所加入ニ関スル議定書ノ審議ニ入ルニ先チ現在ノ状況ニ於テ本議定書ヲ批准スヘキヤ否ヤノ問題ヲ諮ル

幣原大臣 政府ノ意見トシテハ各国トノ振合上又前述セル事情ニ依リ此ノ際御批准済ナルコトヲ希望スト述フ

岡田委員 議定書成立ノ経過及其ノ内容ニ照シ合衆国力所要期日迄ニ批准ヲ完了セサルカ如キ態度ハ甚タ面白カラサルモ国際関係ノ全般ヨリ推シテ批准スヘキモノナルニ於テハ躊躇ノ必要ヲ認メス殊ニ合衆国ノ批准ノ有無ヲ標準トシテ帝国ノ態度ヲ決定スヘキ理由ナシ

松永局長 右「受諾ス」ハ合衆国上院ノ決議其ノモノヲ受諾スル意ニ非スシテ「以下諸条ニ明示セラルル条件ニ於テ」ノ受諾ナレハ合衆国上院ノ決議ハ本院諮詢ノ目的ナリトハ解セラレス

富井委員長 両説トモ根拠アルヤニ覺ユ

二上書記官長 縣案トナスヘキヲ主張ス

岡田委員 議定書正文ニ依レハ政府側ノ意見正当ナルカ如シ

鎌田委員 合衆国上院ノ決議ヲウ呑ミニスル等ナシ政府側ノ意見正当ナルヘシ

幣原大臣 正文ニ依レハ「以下諸条ニ明示セラルル条件ニ於テ」ノ受諾ト解スル方妥当ナルヘシ

二上書記官長 議定書第五条第二項ノ存在理由如何

松永局長 緊急ノ措置トシテ連盟カ合衆国ト協議スル暇ナキコトアリ然モ合衆国ノ合意ナクトモ裁判所ハ連盟機關ノ勧告の意見ノ請求ヲ受理スヘキモノナルコト疑ナシ仍

テ右第二項ノ存在ハ合衆国ノ利益ノ為必要ナリ

富井委員長 本議定書ニ対スル御批准書案ヲ朗読セシメ其ノ後別段ノ質問モナキ為政府側出席者ノ退席ヲ求ム(午

水町委員 岡田委員ノ説ニ賛成ス
石井委員 此ノ際本議定書ノ批准ヲ延期スヘキ理由更ニ無シ仍テ反対説アラハ之ヲ聞キテ後所信ヲ述ヘタシ

富井委員長 反対説ナケレハ議事ヲ進行スヘシトテ逐条審議ニ入ル

荒井委員 合衆国ニ対スル裁判所ノ判決ノ拘束力ハ連盟ノ制裁ニ依ルヤ

幣原大臣 然ラス連盟国ニ非サル国力連盟ノ制裁ヲ受クル筈ナシ

松室委員 然ラハ合衆国ニ対シ裁判所ニテ敗訴セル連盟国カ判決ヲ遵奉セサル場合如何

石井委員 連盟ノ制裁ハ仮令連盟国ト雖裁判所ノ判決ヲ奉セサルノ理由ニテ発動スルモノニ非ス裁判所ノ判決アリタル後ニ於テ戦争行為ニ出テタル国ニ加ヘラルモノナリ

二上書記官長 本件議定書第一条ノ「受諾ス」カ合衆国上院決議中ノ「五箇ノ留保中ニ掲ケラルル特別ノ条件」其ノモノノ受諾ナルニ於テハ合衆国上院ノ決議ハ議定書ノ一部トシテ本院ニ諮詢セラルヘキモノナリ

後四時

斎藤事務官稿

499 昭和5年11月26日 在米出淵大使より
幣原外務大臣宛

常設国際司法裁判所加入問題に関する米国世論の動向について

普通公第六六一号 (12月23日接受)

昭和五年十一月二十六日

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

米国ノ国際司法裁判所加入問題ニ関スル件

本件ニ関シテハ本年九月二十三日付普通公第五一二号ヲ以テ報告申進メ置キタル通り米国政府ハ今期ノ短期議會ニ於テハ国際司法裁判所議定書批准案ヲ上院ニ提出セサルヘシト一般ニ觀測セラレ居ル処過般ノ總選挙以来米國ハ速ニ「ワールドコート」ニ加入スヘシトナス意見相当顯著トナリ来リタルカ此ノ意見ハ特二十一年十一月十一日ノ休戦記念日ニ

於ケル大統領ノ世界平和ニ関スル演説アリタル以来一層濃厚トナリ曩ニ The National Council for Prevention of War ハ大統領ニ請願シ本問題ノ通過如何ニ拘ハラス大統領ハ其ノ教書ト共ニ本件議定書ヲ今会期ニ於テ上院ニ提出スヘシトナシタルカ最近 Federation of Woman's Club ハ其ノ會議ニ於テ今次ノ短期議會カ本問題ヲ取扱フ能ハサルニ於テハ政府ハ宜シク特別議會ヲ召集シテ加入ヲ決定スヘシト決議シ Good-Will Congress of the World Alliance for International Friendship モ亦米國ノ速ナル加入ヲ決議シ「モンタナ」州選出ノ上院議員 Thomas J. Walsh ハ大統領ヲ訪問シテ政府ハ速ニ本件議定書批准ノ手續ヲ執ルヘキ義務アルヘク右ニ對シテハ來春特別議會ヲ開クヘシト要求シタル趣ナルカ又最近「パーシング」大將等知名ノ士百名ヨリ成ル団体モ亦同シク加入方ヲ大統領ニ懇請シタルカ其ノ願書ニ拠レハ米國カ速ニ國際司法裁判所ニ加入スルコトハ米國ノ名譽且幸福トスル所ニシテ若シ大統領カ本件議定書ヲ上院ニ提出スルニ於テハ吾人ハ其ノ通過ニ付テ充分ナル後援ヲ惜マサルヘク來春ノ議會ニ於テ右ノ措置ヲ執ルコトハ各國ヨリ多大ノ好意ト信用トヲ博スルナルヘシト

付往電ヲ以テ大要報告申進メ置キタル通り大統領ハ十二月十日付教書ヲ以テ本件關係議定書ヲ上院ニ提出セリ教書ノ要領左ノ如シ
余ハ今回米國ノ國際司法裁判所加入ニ關スル關係書類ヲ上院ノ審議ニ付セントス右ハ緊急救済及予算等ノ審議案結了ノ後成ル可ク速ニ審議セラレンコトヲ望ム
顧ルニ一九二六年一月二十七日上院ハ慎重審議ノ結果五個ノ留保事項ヲ付シテ其ノ加入ヲ承認セリ右ノ内四個ノ留保ハ裁判所構成國間ノ會議ニ於テ直ニ承認セラレタルカ其ノ後第五項ノ留保ニ応スル為ニ二種ノ議定書作製セラレテ裁判所構成法ノ變更ヲ見タリ右二種ノ議定書ハ既ニ各關係國殆ント全部カ之ヲ署名シ其ノ大多數ノ批准ヲ了シタルカ是等ノ議定書ノ條項ニ拠レハ米國ハ他國ノ外交ニ干与スルノ要ナク米國ハ右裁判所ニ召喚セラルルコトナク又米國ハ他國ト協議シテ常ニ裁判所ヲ利用スルコトヲ得ヘク且米國ハ何時ニテモ何等ノ非難ヲ蒙ルコトナク裁判所ヨリ脱退スルコトヲ得トセラル本件裁判所ノ設置ハ元來米國ニ於テ之ヲ發議シ「ウイルソン」「ハーディング」及「クーリッヂ」ノ各大統領、「ヒューズ」「ケロツグ」及「ステイムソン」等

ナシタリ

右ノ如ク本問題ハ近來可ナリ一般ノ輿論ヲ喚起シ來リタルカ政府トシテハ議事ノ輻輳セル短期議會ニ本件議定書加入問題ヲ提出スルヤ否ヤ又本件ノ為ニ來春特別議會ヲ召集ヲナスヤ否ヤニ關シ今日迄何等其意見ヲ明示シ居ラスト雖モ本件ニ關スル最近世論ノ情勢何等御參考迄報告申進ス本信寫送付先 國際連盟帝國事務局

500 昭和5年12月12日 在米國出淵大使より 幣原外務大臣宛

米國議会上院に提出された常設國際司法裁判所加入議定書に關する大統領教書について

普通公第七〇〇号 (昭和6年1月10日接受)

昭和五年十二月十二日

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

國際司法裁判所議定書批准方ニ關スル件

米國ノ國際司法裁判所議定書批准方ニ關シテハ本月十一日

ノ各國務長官ニヨリテ支持セラレタルモノニシテ元ヨリ米國民ノ國際正義ニ對スル又ハ平和ノ基礎ヲ確固タラシメントスル強烈ナル欲求ニ基クコト勿論ナリ
吾人ハ既ニ「ケロツグ」「ブリアン」協約ヲ締結シテ凡テノ紛争處理ニ平和的手段ヲ利用スルコトヲ約セリ吾人ハ更ニ右手段ノ重要ナル機關タル本裁判所ノ設置ニ對スル各國民ノ努力ニ協賛セサルヘカラス
右ニ關連シテ新聞紙ノ報道ニ拠レハ本件議定書ハ十二月十七日ノ外交委員會ニ付議セラルヘク同委員會議長「ボラー」氏ハ之ヲ休會開ケ後一月初旬ノ本會議ニ提出スル積リナリトナシ又彼ハ殘期二ヶ月ニ足ラサル短日月ニ於テ上院カ之ニ對シ如何ナル態度ヲ執ルヤ憶測スヘカラストナシ「リード」(Reed)氏ハ從來此ノ議會ニ於テ本件ヲ審議スルコトニハ反對シ來リタリト稱セラレタルモ今後ノ態度ニ付テハ「ルートフォオミユラ」ヲ攻究シタル後ニアラサレハ明言シ難シトナシ民主黨議員ノ多クモ亦同様ノ態度ヲ執ルトナサレ就中「ハイラムジョンソン」氏ハ米國ハ非難ヲ蒙ルコトナク何時ニテモ裁判所ヨリ脱退スルコトヲ得トセラルルモ一旦加入シタル後脱退ヲ試ミルカ如キコトアラハ外國ヨ

リハ勿論国内ノ国際主義者ヨリ甚シキ非難ヲ蒙ルコト確實ニシテ事実上脱退ハ不可能トナルヘク又吾人ハ重要ナル国内問題ヲ審議スヘキ貴重ナル時日ヲ割イテ欧州ノ要望ヲ振り向クル能ハスト語レル趣ニテ本件議定書ノ審議ニ際シテハ相当波瀾ヲ見ルヘキモノト予想セラル

右大統領教書新聞切抜相添へ此段報告申進ス

本信写送付先 連盟事務局

501 昭和5年12月18日 在米出淵大使より
幣原外務大臣宛

常設国際司法裁判所加入議定書の米国上院外交委員会における審議延期について

普通公第七二一号 (昭和6年1月10日接受)

昭和五年十二月十八日

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

国際司法裁判所加入ニ関スル件

国際司法裁判所加入議定書ノ上院提出及当時ノ主ナル上院

議員ノ本件ニ対スル態度等ニ付テハ本月十二日付普通公第七〇〇号ヲ以テ報告申進メ置キタル処本件議定書ハ十二月十七日ノ外交委員会ニ於テ共和党議員 Reedノ提案ニ基キ其ノ審議ヲ一九三一年十二月ノ次期通常議会迄延期スルコトニ決定セラレタリ

「リード」其他ノ右延期ヲ主張シタル理由ハ若シ本問題カ此ノ短期議会ニ上程セラルルトセハ議論百出シテ議事ノ進行妨ケラレ延イテハ予算案其他失業、早魃等ノ緊急救済案ノ審議ニ影響シ輿論ノ欲セサル特別議会ヲ開カシムルニ至ルヲ虞レタル結果ナリト称セラル又本裁判所加入ニ賛成スル議員モ亦右ノ如クシテ本件審議ノ遷延セラルルコトハ却テ米国加入ノ動機ヲ傷クルモノナリトノ懸念ヲ抱キタリト報セラル

右ノ如ク本問題ノ審議ハ次ノ議会迄延期セラレタルモ外交委員会ハ之ト同時ニ一九二六年上院留保案項ニ関スル議定書作成ノ任ニ当リタル Elihu Root氏ヲ本議會閉会前ニ外交委員会ニ招致シテ聴取会ヲ開クヘク議長 Borah氏其ノ手続ヲ執ルコトニ決定セリ

尚本案審議ハ十対九ノ票決ニテ延期セラレタルカ右延期案

る在米大使館の所感

普通公第五五六号 (昭和7年1月23日接受)

昭和六年十二月十八日

在米

特命全權大使 出淵 勝次(印)

外務大臣 犬養 毅殿

米国の国際司法裁判所加入問題ニ関スル件

米国の国際司法裁判所加入問題ハ前議會ニ於テ本年十二月ノ通常議会迄之カ審議ヲ延期シタルコトハ客年十二月十八日付普通公第七二一号ヲ以テ報告申進メ置キタル通りナルカ本月十六日ノ上院外交委員会ハ目下重要ナル国内問題輻輳スル際本件ノ如キ議論多キ問題ヲ上程スルコトハ適當ニアラストノ理由ニテ重要国内問題ノ解決セラルル迄之カ審議ヲ延期スルコトニ決定シタルカ議會内ノ空氣ハ戦債問題、満州問題等ニ関連シ外国ノ事件ニ関与スヘカラストナス議論相当濃厚トナリ且過般ノ独逸関税同盟問題ニ関スル国際司法裁判所ノ判決ハ余リニ政略上ノ色彩強ク裁判所ノ判決トシテ適當ナリヤ疑ハシトナス非難アリ之等各種ノ事情綜合シテ再ヒ延期スルコトナリタルモノナルヘシト報

ニ賛成シタル十名ノ議員ハ Borah 及 Gilletノ両氏ヲ除ク共和党議員ノ全部及農勞議員ト称セラルル Shipstead氏ニシテ反対シタルモノハ民主党議員ノ全部並前記「ボラー」及「ジレット」ノ両氏ニシテ民主党議員 Walsh氏ハ此ノ日欠席セリ

右報告申進ス

本信写送付先 連盟事務局

502 昭和6年12月18日 在米出淵大使より
犬養(毅)外務大臣宛

米国の常設国際司法裁判所加入問題の米國議における審議延期について

付記一 昭和一〇年一月三〇日付在米國齋藤(博)大使

より廣田外務大臣宛電報第四三三三

上院本會議における常設国際司法裁判所加入

案否決について

二 昭和一〇年三月一二日付在米國齋藤大使より

廣田外務大臣宛普通公第一四二二

米国の常設国際司法裁判所加入案否決に關す

セラル

右ニ付テ二三新聞紙ハ論評ヲ掲ケ居ルカ賛否区々ニシテ而モ本件延期問題ハ余リ世間ノ注意ヲ惹キ居ラサルモノノ如シ

右報告申進ス

本信写送付先 連盟事務局長

(付記一)

ワシントン 昭和10年1月30日後発
本省 昭和10年1月31日前着

第四三号

往電第三八号ニ関シ(国際司法裁判所加入問題)

上院ニ於ケル国際司法裁判所加入案ニ関スル最終表決ハ一月二十九日夕刻行ハレタルカ賛成五十二(内民主党四十三共和党九)反対三十六(民主党二十共和党十四進歩党一農労党一)ニテ所要数タル三分ノ二ノ得票ニ達セス(七票不足)遂ニ否決セラレタリ投票間際ニ至リ形勢樂觀ヲ許ササルコト看取セラルルヤ政府側及上院賛成派ニ於テハ飽迄本案ノ通過ヲ期シ大統領及國務長官ニ於テ議員ノ説得ニ努メタル

海牙、寿府ニ転電シ紐育ヘ郵送セリ

(付記二)

普通公第一四二号

(昭和10年4月5日接受)

昭和十年三月十二日

在米

特命全權大使 斎藤 博(印)

外務大臣 廣田 弘毅殿

国際司法裁判所加入案否決ニ関スル新聞論調

報告ノ件

過般当国上院ニ於テ行ハレタル国際司法裁判所加入問題ニ関スル討議ノ経緯ニ付テハ屢次電報シ置キタルカ本問題ニ関シ表示セラレタル上院ノ態度ハ米国外交上相当重要ナル意義ヲ有スルモノト認メラレ居リ加入案否決ノ原因其ノ將來ノ国策ニ及ホス影響等ニ関スル論説続々新聞ニ掲載セラレタル状況ナル処是等論説ヲ綜合シ右加入案否決ノ原因及其ノ外交上ニ於ケル意義ニ関スル当館ノ觀察何等御参考迄ニ左記ノ通り報告ス
尚本件ニ関スル諸新聞評論中主ナルモノ別添付録ト共ニ添

外最後ニ至リ曩ニ外交委員会ニ於テ否決セラレタル「ジョンソン」留保案(国際紛争ヲ右裁判所ニ付託スル場合ニハ米國ト当該國トノ間ニ於ケル一般の又ハ特別ノ条約ヲ以テスル用意ニ依ルヲ要スト為スモノニシテ一九二六年ノ決議中ニモ包含セラレ居ルモノナリ)ヲ上院議員「トーマス」ヲシテ新ニ提案セシムル等留保ノ点ニ付テモ譲歩ヲ示スニ至リ右「トーマス」案ハ結局否決セラレタルモ最早右ニ依リ加入問題ニ関スル議員ノ去就ヲ變更スルコト能ハス遂ニ前記ノ如キ敗北ヲ来シタル次第ナルカ右敗北特ニ反対票數ノ多カリシコトハ一般ニ予想外セラレ現政府ニトリテハ前議會ニ於ケル退役軍人恩給問題以來ノ大敗北ト看做サレ居ル処其ノ原因トシテハ(イ)欧州政情ノ不安定ト戦債否認ニ対スル反感及右ニ伴ヒ欧州政局不介入ノ伝統的政策ノ強調セラレタルコト(ロ)「ジョンソン」一派ノ戦術ノ巧妙ナリシコト(ハ)「ハースト」系新聞ノ反対宣伝(ニ)本會議ノ討議永引き其ノ間各議員ニ対シ國內各方面ヨリノ反対電報集セルコト等ニ基クモノト認メラレ居レリ今回ノ敗北ニ依リ米國ノ裁判所加入ハ当分見込ナキニ至レルモノト云フヲ得ヘシ

付ス

本信写送付先 在欧各大使及寿府

記

一、国際司法裁判所加入問題ハ本年一月九日上院外交委員會ニ於テ裁判所規程、同改正規程及一九二九年ノ米國加入議定書受諾ニ関スル「ロビンソン」ノ留保決議案ヲ可決シ同十五日ヨリ上院本會議ニ於テ右決議案ノ審議ヲ開始シタルカ二十四日ニハ「バンデンベルク」ノ追加留保決議案二十九日ニハ「トーマス」ノ追加留保決議ヲ採択シタル上同二十九日最終票決ヲ為シタル次第ニシテ從テ右最終票決ノ対象トナリタル留保決議案文ハ右三個ノ決議案ヲ合シタルモノニシテ左ノ通りナリ

Resolved (two-thirds of the Senators present concurring), That the Senate advise and consent to the adherence by the United States to the said three protocols, the one of date December 16, 1920, and the other two each of date September 14, 1929 (without accepting or agreeing to the optional clause for compulsory jurisdiction), with the clear understanding

of the United States that the Permanent Court of International Justice shall not, over an objection by the United States, entertain any request for an advisory opinion touching any dispute or question in which the United States has or claims an interest.

Resolved further, That adherence to the said Protocol and Statute hereby approved shall not be so construed as to require the United States to depart from its traditional policy of not intruding upon, interfering with, or entangling itself in the political questions of policy or international administration of any foreign state; nor shall adherence to the said Protocol and Statute be construed to imply a relinquishment by the United States of its traditional attitude toward purely American questions.

Resolved further, as a part of this act of ratification. That the United States approve the protocol and statute here in above mentioned with the understanding that recourse to the Permanent Court

of International Justice for the settlement of differences between the United States and any other state or states can be had only by agreement thereto through general or special treaties concluded between the parties in dispute.

二、右留保決議案ト一九二六年ノ國際司法裁判所加入ニ関スル上院ノ決議トヲ比較スルニ一九二六年ノ決議中ノ重要事項ハ悉ク今回ノ決議案中ニ包含セラレ居レリ只相違点トモ見ルヘキハ勸告の意見不受理ノ点ニ付一九二六年ノ決議カ裁判所規程参加国全部ノ公文交換ニ依ル明示の承認ヲ必要トシ居ルニ反シ今回ノ決議案ニ依レハ右カ米國側一方の留保ノ形トナリ規程参加国ノ黙示の承認ヲ以テ足レルコトナレル点ニ過キス

然ラハ茲ニ一九二六年ノ決議カ上院ヲ通過シ今回ノ決議案ノ不通過トナレル理由如何ノ問題ヲ生スル処右ニ付テハ「ロンドン」一派ノ「タクチック」ノ拙劣ナリシコトモ其ノ原因ノ一トシテ數ヘ得ヘキモ(例ヘハ「バンデンベルク」及「トーマス」ノ決議案ヲ一度外交委員會ニ於テ之ヲ否決シタルニ拘ハラス形勢惡シト見ルヤ最終票決

前ニ至リ之ヲ復活シタルカ如シ往電第三四号及第四三号参照)主トシテ上院及国内ニ連盟ニ対スル反対換言スレハ國家主義的傾向ノ増大シタルニ依ルモノト認ムルヲ得ヘシ

三、現下ノ米國ニ國家主義的傾向顯著ナル点ニ関シ二月十日「サンデー・スター」紙上「サイモンズ」(別添付録第一)(ハ左ノ如ク論シ居レルカ右ハ大体ニ於テ妥当ナル觀察ト云フヲ得ヘシ

「國際司法裁判所加入問題ニ関スル上院ノ態度ハ米國ノ一部ニハ國際協調の精神盛シナルモ一般民衆ノ間ニハ國際の組織ニ対スル深刻ノ不信ノ存スルコトヲ示シタルモノニシテ内外ノ政治家ニ対シ好個ノ教訓ヲ与ヘタルモノト云フヲ得ヘシ

『フーヴァー』政府カ國際連盟トノ間ニ相当ノ協調ヲ保チタル以來米國力漸次寿府ニ接近シツツアリトノ觀察内外ニ増加シ来リ殊ニ欧州ノ政治家ハ米國ノ真実ノ輿論ニ「タツチ」スルコトナク寿府ニ於ケル米國側代表者等ノ情報ニ欺カレ米國ノ連盟加入ヲ以テ時期ノ問題ナリト思惟スルニ至レルカ米國ハ『ウィルソン』時代以來常ニ少數ノ理想主義者ヲ除キ國家主義的精神ヲ以テ終始シ来レ

ルモノニシテ特ニ今日程右傾向ノ顯著ナルコトナシト認メラル

即チ米國ニ於ケル不況發生以來一般民衆ハ其ノ原因カ米國ノ世界戦争加入ニ在リトナシ殊ニ連合國ノ戰債否認、日本ノ滿州侵略ニ対スル連盟ノ無力、独逸ニ於ケル「ナチス」ノ台頭等ハ益々米國民衆ヲ孤立的傾向ニ向ハシムルニ至レルモノナリ右國家主義的傾向ノ強烈ナル点ニ付テハ曩ニ倫敦經濟會議ニ於テ當時凡テノ會議参加國カ世界再建ノ第一歩ハ通貨ノ安定ニシテ右安定ノ達成セララル迄ハ他ニ何等ノ有効ナル措置ヲ執ルコト能ハストノ意見ニ一致シタルニ拘ラス米國大統領力之ニ反対ヲ表明スルヤ米國輿論ノ喝采ヲ博シタルニ徴スルモ明ニシテ更ニ經濟的ニ云フモ「ニューデイル」其ノモノカ既ニ國家主義的ニシテ又海軍ヲ條約限度迄建造スルノ計画ヲ樹テタルコト陸軍ノ擴張案ノ如キモ右精神ノ表現ニ外ナラサルナリ云々」

四、國家主義的問題ニ関連シ特ニ注意スヘキハ裁判所加入問題ニ関スル上院ノ討論中「モンロー」主義ノ強調セラレタル点ニシテ加入反対議員ハ勿論賛成議員ノ或ルモノ

モ「モンロー」主義下ニ於ケル米國ノ委任ニ付論及スル所アリタリ

「バンデンバーグ」決議案中ノ「純『アメリカ』問題ニ對スル伝統的態度」ノ字句カ「モンロー」主義ヲ包含スルモノナルコトハ提案者自ラ之ヲ説明シ更ニ一般ニモ認メラレタル所ナルカ上院議員「ロング」ノ如キハ「モンロー」主義ハ米大陸ニ於ケル平和ノ維持カ純然タル「アメリカ」共和諸國ノミノ関心事項タルコトヲ定メタルモノニシテ歐洲諸國カ米大陸ニ於ケル紛争ノ解決ニ参与スルカ如キコトヲ排除スルモノナリト論シ連盟カ「チャコ」紛争ニ干与シ居ルコトヲ難スルト共ニ米國カ若シ國際司法裁判所ニ加入セハ右ハ歐洲諸國ノ南米ノ紛争ニ對スル介入ヲ承認スルコトトナルヘシト述ヘ別添ノ如キ留保決議案ヲ提出スル所アリタリ(付録第二)

右ハ聊カ極端ナル議論ニシテ二月三日「サンデー・スター」紙上「ナーバル」(別添付録第三參照)ハ「南米諸國カ其ノ平和維持ニ関シ歐洲諸國ノ調停ヲ承認スルヤ否ヤハ南米諸國ノ自ラ決定スル所ニシテ米國上院ノ関知スル所ニ非ス当初ノ「モンロー」主義ハ(イ)歐洲諸國ノ米大陸

当り上院三分ノ二ノ同意ヲ要スルコト」ノ趣旨ノ留保決議案(別添付録第四參照)ヲ提出セルニ對シ一月二十三日大統領カ新聞記者ニ對スル「インターヴュー」ニ於テ右案ハ外交關係處理ニ関スル大統領ノ權限ヲ侵害スルモノナリトノ反對聲明ヲナシタルハ(往電第三四号)條約締結權ニ関スル政府ト上院トノ間ニ於ケル憲法制定以來繼續セル争ヲ繰返シタルモノニシテ右大統領ノ聲明ハ議會ニ對スル「タクチック」トシテハ拙劣ナリシモノト思考セラル

即チ上院側ニ於テハ裁判所ニ付託スルニ當リ作成スル所謂「コムプロミ」ハ憲法第一章第一條ノ「Treaties」ニ該當スルモノナルヲ以テ上院三分ノ二ノ同意ナクシテハ之ヲ締結スルヲ得ストナスニ對シ政府側ハ右ハ政府限リニテ締結シ得キ Executive Agreement ナリト主張シ双方共未タ曾テ譲リタルコトナキ狀況ニシテ上院ハ右ノ理由ニ依リ一九〇四年ニハ國務卿「ジョン・ヘイ」ノ締結セル十一ヶ國トノ仲裁裁判條約ヲ拒否シ近クハ一九二九年ノ「アメリカ」諸國間ノ仲裁裁判條約モ此点ニ関スル政府ト上院トノ意見一致セサル為効力ヲ發生セサル次第ナ

ニ對スル殖民地ノ設定ニ反對ナルコト(イ)歐洲諸國ノ政治的制度ヲ米大陸ニ擴張スルノ目的ヲ以テ米大陸ニ干渉スルコトニ反對ナルコトノ二点ヲ骨子トスルモノニシテ「ロング」ノ如キ見解ヲ認ムルノ要ナシ「ロング」等ハ恐ラク一八八二年國務卿「フレリントン」カ「アメリカ」ノ問題ハ「アメリカ」自身ニ所屬シ歐洲諸國ハ當時國ノ同意アル場合ニモ「アメリカ」諸國ノ問題ニ干与スルコトヲ許サスト述ヘタル点ニ執着シ居レルモノト認メラルモノ右ハ久シキ以前ニ於テ米國政府ノ拋棄セル所ナリト論シ其ノ所論ヲ非難シ居レルカ本問題ニ関スル討議ヲ通シ「モンロー」主義ニ關スル解釈及適用ノ問題ニ付テハ上院ト政府側トノ間ニ相当ノ開キアルコトハ窺知シ得ヘク上院ニハ最近政府側ノ善隣主義ノ表明及國際機關ヘノ参加等カ稍行キ過キタリトノ感ヲ有スルモノアリ又依然米國ヲ以テ「アメリカ」大陸ノ「ピース・ガーデアン」ナリトノ觀念ヲ棄テサル分子アルハ事實ニシテ「ボラー」カ「メキシコ」干渉案ヲ(往電第八五号)提出セルカ如キモ其ノ一例ト見ルヲ得ヘシ

五、上院議員「ノーリス」カ「紛争ヲ裁判所ニ付託スルニ

リ

六、今次ノ國際司法裁判所加入案ハ賛成五十二對反對三十六ニシテ「ヴェルサイユ」條約批准ノ際ト同シク過半数ノ同意ヲ得タルモ三分ノ二ノ所定数ニ達セサル為否決セラレタル次第ナルカ條約ノ批准ニ當リ上院三分ノ二ノ同意ヲ必要トスルハ米國特有ノ制度ニシテ其得失ニ付テハ從來屢々論セラレタル所ナルカ二月三日「ワシントン・ポスト」紙上「ウォルトマン」(別添付録第五)ハ右ニ関シ左ノ如ク論シ居レリ

「條約批准ニ當リ三分ノ二ノ同意ヲ要スルノ制度ハ外交政策ノ確立ヲ不可能ナラシムルモノニシテ今次裁判所加入問題ノ如キ既ニ五代ノ大統領之ヲ『プツシュ』シ全國五分ノ四ノ新聞紙之ヲ支持セルニ拘ラス七票ノ差ヲ以テ破レタル次第ニシテ斯クテハ各國ハ大統領カ果シテ國民ノ代弁者タルヤ否ヤヲ疑フヘシ條約批准ノ手續ニ付テハ歴代ノ政府悩ミ來レルモノニシテ『ジョン・アダムス』『ジョン・ヘイ』ノ如キ何レモ上院ノ態度ニ困惑シ『ヘイ』ノ如キハ『上院ニ提出セラレタル條約ハ關牛場ニ赴ク牛ノ如ク再ヒ生キテ歸ルコトナシ』ト云ヘリ學者中ニ

モ右カ憲法中ノ最大欠陥ナリトナシ其改正ノ必要ヲ論スルモノ少ナカラス例ヘハ『ヴァンダービルト』大学教授『フレミンク』及『ミネソタ』大学教授『クインシー・ライト』ノ如キ之ナリ」云々

右「ウォルトマン」所論ノ如ク現行条約批准制度ニ相当弊害アルコトヲ認メ居ルモノ少カラサルハ事実ニシテ上院票決終了後「アイダホ」州選出上院議員「ボーブ」(別添付録第六)ノ如キハ条約批准ニ関シ過半数ノ同意ヲ以テ足ルコトスル様改正案ヲ提出シ又下院議員「ライカム」ハ「テキサス」及「ハワイ」ノ併合ヲ上下両院過半数ノ決議ヲ以テ敢行セル先例ニ鑑ミ国際司法裁判所加入

ヲモ上下両院ノ決議ニ依リ之ヲ行ハムトスルノ案ヲ提出シタルニ徴スルモ明ナル次第ナルカ今日苟モ上院ノ権限ヲ縮少セムトスル如キ案ノ到底成立ノ見込ナキコトモ明ニシテ前記「サイモンズ」所論中ニ論及セラレタルカ如ク米國ニ於テハ政府カ如何ナル国策ヲ立案スルモ右カ苟モ國際的責任ニ關連スル場合ニハ上院ニ於ケル「ミノリテイ」ニ依リ「ベトー」セラルルノ惧大ニシテ英仏ノ如ク国策カ一度政府ニ依リ決定セラレタル以上議會ノ承認ハ單ナル形式ニ過キサルト著シク事情ヲ異ニスル点ハ米國政情研究者ノ常ニ心得置クヘキ所ナリト思考セラル

4 欧州連合組織問題

503

昭和4年8月29日

在仏國河合臨時代理大使より
幣原外務大臣宛

仏國外相ブリアンの欧州連合提案に関する仏

国各紙の論調について

公第五一八号

(10月7日接受)

昭和四年八月二十九日

在 仏

臨時代理大使 河合 博之(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

欧羅巴合衆国ニ関スル件

仏國外相「ブリアン」カ先般新聞記者トノ会見ニ際シ欧州合衆国ノ建設方提議スルノ意思アル旨ノ漠然タル希望ヲ洩シタル処当地新聞紙上ニ相当ノ反響アリタルカ其主要ナルモノ左ノ如シ

「ブリアン」ハ今年九月ノ寿府國際連盟總會ニ於テ右提議ヲナスノ方向アルカ如キモ各国カ言語風習伝統等ヲ異ニスル欧羅巴ニ於テ合衆国建設ヲ企画スルニ当リ範ヲ北米合衆

國ニ取ラハ必スヤ蹉跌ヲ招クヘク要ハ政治上ノ紛争ヲ避クル目的ニ於テ先ツ經濟上ノ協定ヲ初ムルニアリ關稅同盟ノ締結ノ如キ其ノ緊要ナルモノト云フヘク現在欧州各國ノ議會カ保護稅率ヲ高メツツアルカ如キ事態ハ須ク之ヲ除去セサルヘカラス(ジュルナル・デ・デバ)

戰後ノ諸懸案ニシテ今夏海牙會議ニ於テ解決ヲ見ンカ本問題ハ今年末ニハ真面目ニ考慮セラルルニ至ルヘキカ右問題ハ經濟財政政治ノ三方面ヨリ觀察スルノ必要アリ經濟問題トシテハ生産並ニ消費ニ付欧州ニ於ケル市場ヲ統一シ財政的見地ヨリハ社会的ニ有用ナル用途ニ充ツル為大陸ノ資金ヲ合同スルノ要アリ政治的ニハ國際軍隊ヲ組織シテ國家間ノ安全ヲ確保スルニ努メサルヘカラス(マタン)

欧羅巴合衆國ハ英國ヲ除キ欧州大陸諸國間ニ構成セラルヘキモ之カ為ニハ先ツ独逸トノ經濟財政問題ヲ解決シ「ライン」問題ノ落着ヲ見サルヘカラス(エコー・ド・パリ)スル計畫ハ他ノ國際団体ニ対シ何等ノ脅威ヲモ感セシムルモノニ非スシテ「ロカルノ」並ニ「ジュネーヴ」ノ精神ヲ